

煙吹き立てず、櫃には蜘蛛の巣掻き、飯炊ぐことも忘れて、鶴島のどよびをるに……」

【屋敷町】 ヤシキマチ。武家屋敷の續いてゐる町。

【表長屋】 オモテナガヤ。表通りにある長屋。長屋は一棟の内を幾つにも區劃し、一區劃毎に一戸づつ住居するやうに造つた長い家。

【知行】 チギヤウ。江戸時代に、一萬石以下の武士の受け領した土地をいふ。

「知行にありつく」とこゝでいつてゐるのは、先づ生活の資にありついたといふ意。

【旦那】 ダンナ。もと梵語の「Dana」から來た語。佛教では、財物を施與する信者を僧から呼ぶ語。

一般語としては、家人・婢僕から、その主人をさしていふ語をいふ。

【月代】 サカヤキ。應仁の亂頃から武士が冑を著けたのによつて始まり、後に一般の風となつたものである。男子が額から頂にかけて髪を剃ること。

【鏡立】 カミミタテ。鏡を立てかけるに用ひる木製のわ

く、又は臺をいふ。鏡かけ。鏡臺。

【百に三把】 錢百文に對して大根三把の相場の意。

【二十四文づつにしておけ】 一把を二十四文づつにせよとの意。

【現在】 ゲンザイ。この場合は、實際なこと。いつはりならぬこと。現に然ること。

淨瑠璃、蟬丸に「現在御子を捨て給ふ、寂慮如何なる事やらん。」

用明天皇職人鑑に「現在母を手にかけてし、後の冥加のいかならん。」

【泣きあるく】 品物の呼び賣をして歩くことをいふ。

【懸値】 カケネ。普通の賣値段よりも大きく言ひかける値段。

【水の入つたまゝで】 水をあけるとその物音などで人に氣付かれるので、水の入つたまゝを盗んだのである。

【ぬからぬ顔】 油斷のない顔つき。氣のきいた顔つき。

【直はねぎるまい】 値段をまげよとはいふまいとの意。

【逃げていなう】 逃げて歸らう。「いなう」は「往なん」の

音便。歸らう、往かうなどの意。

【はした賣】 一部分だけ賣ること。

【一生懸命】 イッシヤウケンメイ。一所懸命の轉訛。一五

「傳書鳩」の課の「懸命」の項参照。

【われはきつうろたへてゐるぞよ】 お前はひどくあわててゐるぞよとの意。

「われ」は目下の者に對していふ對稱の代名詞。

【とつくりと】 「篤と」の訛。念を入れて。よくよく。

### 9 挿 圖

#### 心學の講義

教育資料中から採つた。心學道話の講義中の有様である。女子席を別にして、男子席から見えぬやう簾をかけるなど、特別の用意がしてある。

### 10 参 考

#### 省略された原文

教材とするために原文に多少の削除を施してあるので、そのうちから大切な部分を補つておく。  
冒頭は次のやうになつてゐるのを改めたのである。

……所は江戸の神田邊と聞いたが、名は何とやら申して、至つて貧乏な暮し方。夫婦に子供三人、亭主といふは三十四五、女房は二十八九。家は九尺二間のうら店、鼠の巢を見るやうな住居。商賣は何と取定めた事もなく、只明けても暮れても、一合酒と女夫喧嘩、小博奕が商賣同前、朝は朝寝し、夜は夜ふかし、針を藏に積んでもたまらぬ身持ゆゑ、とうとう貧乏の底になつて、せう事なしに青物賣と出かけ、四五百文の錢で親子五人がその日ぐらし、朝五百文で土物だなど大根を買つて、その日一日江戸中を大根大根と泣きあるいて、暮がたに七百元ばかりにし、内へ戻ると、米買へ、酒買へ、醬油買へ、油買へ、薪買へ、子どもの鼻薬まで、二百文の錢であす一日の軍用金、残つた五百文は即ちあすの商賣のもつて、一日休むと一日食はずにゐねばならぬ、小ぜはしない身代。その中から無理無體に雨が降るといふては半日休んで博奕うち、頭痛がするといふては晝から歸つて女夫げんくわ、親子五人が食はずにゐる事も折々あると聞きました。こんな咄はお子たちもよう聞いてお置きなさるが宜しい。これはこれ小さい時にと、様やか、様のおつしやることを聞かんだ報で、成人してこのやうに罰があつて難儀な暮しをせねばならぬ。随分御兩親のおつしやることをよう聞かねばなりま



せぬ。さてかの大根賣が、例の通り一荷の大根を擔ひ……  
一二頁「縁先の金盃にふつと目がついた」の次

こゝが大事の聞き所ぢや。心の關所が油断なく番してゐたら、金盃に目はつかぬ筈ぢや。子曰く「君子固に窮す。小人窮すればこゝに濫す。」これは論語衛の靈公の篇に、孔子陳蔡のあひだにかこまれ、口中食を斷つて、門人悉く病み疲れて立つこと能はず、子路といふ人、甚だこれを愠つて、孔子にこの事を問うて曰く「君子も亦窮することありや。」と。此の心は、我が師天に從うて道を行ふ。何の故にかくの如く困窮するぞと問はれた。この時孔子の御返答には、君子固に窮すとは、凡そ人の貧富窮達、これ皆天命ぢや。君子といへども困窮すべき時至らば、その困窮を守るが天命に從ふといふものぢや。困窮の時にあたつて困窮せまじとさわきまはるは、天命に逆うて、誠といふものにはあらず。されば困窮する時にあつて困窮するはもとより知れた事なり。然るを小人は困窮の時に臨んで無理に困窮せまじとが故、終に悪心が起つて、ふと金盃に眼がつくやうになる。こゝを指して「小人窮すればこゝに濫す。」と孔子は仰せられたのぢや。これは大根賣の事ばかりではない、われ／＼どもの身の上にもこれに似た事があるものぢや。親類の無心、據ない掛損、或は病難、或は

貧乏、その時が廻つて來たら、どう思うても通れられるものではない。かるが故に中庸に、「君子その位に素して行ふ。」と。有難い天命の貧乏、有難い親類の無心、有難い掛損、有難い病難と想うて大切に天命を守つてゐると、物にはすべて來る時と去る時とあるもので、貧乏し通しにするものでもない。おのづから通れる道か出來るものぢや。是によい譬がござります。天竺で獵人が猿を取るには、鵜をまるめて猿の前に投じます。猿は腹立て、かの鵜を片手づかみにつかむと、指がついて離れぬ。驚いて左の手でかの鵜を取除けようとする、左の手もまたつく。益々あわてて右の足をかけて取らんとすれば、また右の足もつく。愈々うろたへ、左の足で取らんとすれば、これもつく。たゞひとまるめの鵜のために、四つの手足悉くついて離れず、さながら括り猿のやうになると、獵人が手足の間へ棒を通して荷うて歸ると聞きました。これはこれ身を通れんとするによつて、括り猿になるのでござります。はじめ右の手でつかんだ時、騒がすとしつと辛抱してゐるとおのづから手のあたゝまりで鵜はたれて、自然と危きを通れるに、その辛抱が出來ぬによつて、うろたへ騒いで命を失ふ。なんと氣の毒な括り猿ぢやござりませぬか。とかく辛抱が大事ぢや、うろたへまいぞ。うろたへると金盃が欲しうなります。そこでかの大根賣が、縁先はしめてある……

## 二〇 近江聖人

### 1 解題

近江聖人中江藤樹の偉大なる人格及び感化を側面から記述したもので、東西遊記の中に見えてゐる。

「東西遊記」(トウザイイウキ)は二十卷。橋南谿が醫學修行の爲四方に旅行した時の紀行で、國々の奇觀・異聞、孝子・忠僕の美譚、人情・風俗の差別、氣候・産物の巨細に至るまでを平明簡潔なる和漢混淆文の體を以て記したものである。その前篇十卷は寛政七年(二四五)に、東遊記續篇五卷は同九年に、西遊記續篇五卷は同十年に刊行せられた。近頃有朋堂文庫その他に收められ、世人に愛讀せられてゐる。

### 2 作者

橋南谿 タチバナ ナンケイ。  
徳川時代の醫學者且國學者。氏は宮川。名は春暉(ハルトミ)。字は惠風。南谿はその號。別に梅華仙史(梅仙)とも號した。伊勢の人。七歳のとき、父が孟子の牽牛章の羊を以て牛に代へる條を

## 橋南谿



講義するのを傍で聴いてゐて、よく意味をさつたといふ。十四

五歳の頃父を喪つたが、母が生計に苦心してゐる状を見て、深く感ずる所あり、遂に讀書を廢して醫を學び、香川太沖(修庵)の學流を汲んで、その秘奥を極め、京に上つて醫を業とした。天明元年(二四四一)母の歿するや、年來の希望なる東西漫遊を思ひ立つて、先づ西遊を志し、同二年秋京を發して、山陽・西海・四國を歴遊し、翌年秋京に歸つた。次いで東遊を志し、同四年秋京を發して東海・奥羽・北越の名勝を探り、轉じて信濃に入り、更に越後から北陸を経て京に歸つた。東西の遊歴合はせて五年、更に南紀をも歴遊して、その足跡が天下に普かつた。南谿は又博く和漢の典籍に涉り、詩を賦し、歌を詠じ、俳諧を作つた。就中、紀行文家として特に名高かつた。東西遊記正續篇及び北窓瑣談はその名著として知られてゐる。

晩年に及んで、その名愈々高く、召されて尙藥となり、從六位下石見介に敘せられた。文化二年(二四六五)四月十日歿。年五十三。



### 3 要旨

無學ながらも、わが受くべきものでないと思つた金は、どこまでも受けぬといふ。この馬方の心の美しさを見た。そしてこの馬方をかくまで感化した中江藤樹の人格を考へさせたい。口ばかりの講釋では、到底かうした感化は出来ないものである。藤樹の人格は、後の熊澤蕃山の事によつてもうかはれる。

### 4 概説

話は大體前後の二段に分けられる。前段は飛脚と馬方の話、後段は蕃山と藤樹との話である。前段には間接に藤樹が出てゐるに對して、後段には直接に出てゐる。

### 5 取扱上の用意

■馬方の美しい心は隨所に出てゐる。地圖で見るとかなり離れてゐる道を、直に金を返すべく走つてゆくこと、金十五兩を出されて驚いてゐる所、押問答の末鳥目二百文を要求して、これで酒を買つてその家の人に振舞ひ、自分も酔うて歸る所、殊に最後の酒を買つた態度は、眞底か

ら満足してゐる様子が見えてうれしい。これでこそ、後で思ひ出して、十五兩を黙つて貰はなかつたのは惜しかつた、などと後悔する氣遣はない。美ましい限である。■藤樹の感化も感化であるが、そこにはもと田舎人の純樸な心があつて、それが藤樹の感化でみがかれたものと見なければなるまい。

■飛脚の話を知りて、その翌日すぐに江州に行つた熊澤蕃山もえらい。翌日すぐに行くといふ熱情、それでこそ二日も門前に佇むことが出来るのである。これに對して謙遜な藤樹、しかも老母の心には忤はれないやさしい藤樹、すべて心地よい寄合である。

### 6 設問

- 1 次の語をやさしく言換へて見よ。  
イ 色々こしらへいふ。  
ロ 飛脚も感に堪へかぬ。  
ハ 辛き命生きのぶ。  
ニ その人こそまことの儒といふものなれ。
- 2 「その高恩」の「そこ」とは、どういふ意味か。

3 昔の貨幣の計算に於て、兩と歩と文との關係を説明せよ。

4 この文の中から、今、あまり用ひられなくなつた語をあげよ。

(例へば、鳥目。飛脚。金子。兩。歩。文。隨從。)

5 この課に於ける眼目は如何なることか。

### 7 編纂の用意

前課に掲げた鳩翁の道話「心の洗濯」に關聯して、中江藤樹の偉大なる感化を詳かにせしめ、近江聖人てふ讚辭の決して虚譽にあらざるを知らしめて、深く反省修養の資たらしめたい。

又、文章の上からは、徳川時代の能文家の手に成つた平明達意の佳章を味讀せしめて、その妙諦を心解せしめた

### 8 釋義

【近江聖人】 アフミセイジン。中江藤樹の敬稱。藤樹、名は原。字は惟命、通稱は與右衛門。藤樹はその號である。

慶長十三年(二二六八)近江國(滋賀縣)高島郡青柳村字小川に生れた。父は農を業としてゐたが、米子侯加藤泰興に仕へてゐた祖父の許に養はれて、その嗣となつた。米子侯はその後伊豫の大洲に轉封された。よつて藤樹も亦これに従つて大洲に移住した。十五歳のとき祖父を喪ひ、十八歳のとき父を喪つた。二十七歳のとき老母を大洲に伴なはうとしたが、老母は他郷にゆくことを肯じなかつた。よつて官を辭して故郷に歸り、母の膝下にあつて孝養をつくした。三十七歳のとき、始めて王陽明全書を得てこれを読み、年來の疑問が全く氷解して、陽明學を信奉するに至つた。實に我が國陽明學の鼻祖である。人となり誠實で樸直、その感化力の如何に大きかつたかは本課の話でも知られる。慶安元年(二三〇八)八月二十五日卒した。年四十一。里人は父母を喪つたやうにこれを悲しんだといふ。後にその家を祀廟として藤樹の靈を祀り、今にその祭が絶えない。世にこれを藤樹書院といふ。

著書に大學啓蒙・孝經啓蒙・大學解・大學考・中庸解・論語



考説・翁問答・神方奇術・藤樹先生遺稿・心學文集・江西文集等がある。

明治四十年十月、正四位を追贈せられた。

【加賀】北陸道の一國。修して加州ともいふ。西は日本海に面し、他は山嶽を以て能登・越中・飛騨・越前と界してゐる。海岸には狭長な平野がある。南東隅には白山が聳え、附近に温泉が多い。金澤市及び四郡より成る。石川縣の所管。

【飛脚】ヒキヤク。昔、信書や、金銀・貨物などの送達を業としたもの。脚夫。

【金子】キンス。かね。貨幣。金錢。ぜに。

摭青雜説に「曾失金子一包。」

【二百兩】「兩」は昔時の貨幣の名目。金貨では一分の四倍、銀貨では四匁三分の稱。二百兩は小判にすれば二百枚。

「小判」は徳川時代の本位金貨。形状は楕圓。甚だ薄く、表面に桐・壹兩・光次花押の捺印及び金座年寄役の小印がある。これに慶長小判・元祿小判・寶永小判・正徳小判・享保小判・元文小判・文政小判等、多くの種類がある。教科書の蠶頭「小判」

の挿圖参照。

【京】キヤウ。みやこ。こゝは京都。

【江州】ガウシウ。近江國を支那流に呼ぶ名。近江は舊東山道の一國。古くは淡海と書いた。琵琶湖があるからの名で、遠江の遠淡海(トホツアフミ)に對して近淡海(チカツアフミ)とも稱した。大津市及び十二郡より成り、全部滋賀縣の所管に屬する。

【河原市】カハライチ。今の滋賀縣高島郡新儀村安井川の一名。安曇川の北。大津市の東北五十軒。教科書蠶頭の挿圖参照。

【榎木の宿】エノキのシユク。今の滋賀縣滋賀郡和邇村大字榎木。和邇川の北。大津市の東北十八軒。教科書蠶頭の地圖参照。

「宿」は、宿驛・宿場などの略。街道通行の旅客をやどし、又は荷物の運搬に要する人馬をつぎたてる設備のあるところをいふ。

【馬方】駄馬を曳くことを職業とするもの。まご。ばくらう。

【馬のすそ】馬の下脚部。衣の下の縁(フチ)、即ち脚にあたるところを「裾」といふより出た語。

【今の飛脚の取忘れたるにこそ】今の飛脚が、きつと、取り出すことを忘れたのであらう。

「こそ」の下に「あれ」あらめ」などいふ結(已然形)の語が略されてゐることを注意させたい。

【宿に至り】ヤドにイタリ。こゝを「シユク」とよまぬやうにさせたい。

【蘇る】ヨミガへる。黄泉(ヨミ)より歸る義。死して再び生きること。いきかへること。蘇生。復活。

萬葉集、卷三に「わたつみの沖に持ちゆきて放つともうれむぞこれがよみがへらまし」

【行李】カウリ。旅行に携へる荷物。又旅行の荷物を容れる具。竹又は柳などで編んで造る。こり。

【そこの高恩】あなたの高い恩誼。

「そこ」は、場所の代名詞を二人稱(對稱)の人代名詞に轉用したのである。

「高恩(カウオン)は、高大な恩徳。厚恩。鴻恩。

津國女夫池、三に「七世の父母の恩より今御兩所の御高恩、土くれに須彌、比べても比べ難けれども」

【當座の御禮】タウザのオンレイ。さしあつてのおれさ。

「當座」は、すぐそのば。即座。

狂言、雙六僧に「相手を切り殺し、その身も當座に相果て申され候。」

【何の禮】原文には「何の禮ごと」とあるが、今はあまり用ひぬ語であるから改めることにした。

【いろ／＼にこしらへいへども】いろ／＼になだめすかして、「ぜひこの十五兩の金を受取つてくれ。」といつたけれども。

「こしらふ」は、なだめすかす、取締ふ、などの意。

【二歩】ニブ。「歩」は舊貨幣の量目。一兩の四分の一。故に「二歩」は、一兩の二分一即ち半兩。

【せめて】、物事の最少限をいふことば。已むを得ずば。せめてのことば。

謡曲、小袖曾我に「うたへや、せめていま一目。御簾・几帳



も下りたり、あら情なの御事や。」  
狂言、雁争に「せめてその羽なりとくれ。」

【謝禮】 シャレイ。謝意を表する贈物。おれいに贈る品物。  
【餘儀なくのたまへば】 どうしてもいたゞかなければなら  
ないやうに仰せられますから。

「餘儀なく」は、よんどころなく。いたしかたなく。強ひ  
て。

狂言、布施ないに「はじめての御方から参つてくれと仰せら  
れ、餘儀なうてこれへ参り。」

【鳥目】 テウモク。錢(ゼニ)の異名。形が鶯鳥の目に似て  
ゐるから起つた名だといふ。形が圓くて、中央に孔があ  
る。百文・二百文とまとめて、緋(サシ)にさして持つ。  
貨幣秘録「金銀相場の事」の條に、

「明暦元年(二二二五)乙未十二月、町中錢取引、時々  
相場次第相對にて賣買すべく、御定直段は金一兩につき  
四貫文、一分に付一貫文たるべき旨、令あり、天和二年  
(二三四二)壬戌五月、元祿十三年(二三六〇)庚辰十一  
月、重ねて金一兩錢四貫文替たるべき由令せらる。」

とある。以てその價值を知るべきである。一貫文は千文  
である。教科書百二十七頁蠶頭の挿圖参照。

【申し請く】 マウシウク。申して請ひうけること。願つて  
受けること。

平家物語卷二、烽火の條に「申し請くる所詮は、只重盛がく  
びを召され候へ。」

【二百文】 鳥目二百枚。一分の五分の一。なほ前の「鳥目」  
参照。

【その家の人に振舞ひ】 その家の人をもてなし。その家の  
人に馳走をして。

「振舞ふ」とは、もてなすこと。馳走すること。

大藏流狂言、伯母酒に「澤山にある酒を一つ振舞ふ事がない  
とな。」

【感に堪へかね】 たいそう感心して。馬方のあまりの寡慾  
にたいそう感心して、たまらなくなつたことをいふ。

【さるにても】 それにしても。さやうにしても。

源氏物語、少女の巻に「ゆかりむつび、ねぢけがましき様に  
て、おととも聞きおほすところ侍りなむ。さるにてもかゝる  
事なむと知らせたまひて」

【在所】 ザイショ。(一)ありか。すみか。(二)ゐなか。在郷。

(三)田舎のわが家。くにもと。ふるさと。郷里。故郷。こ  
こは(三)の意。

【小川村】 滋賀縣高島郡青柳村小川。  
教科書一二七頁蠶頭の挿圖参照。

【講釋】 カッシヤク。物事の義理を説き明かすこと。

【折節】 ヲリフシ。(一)丁度その時。(二)をりく。時々。こ  
こは(二)の意。

【非道】 ヒダウ。(一)道理ならぬこと。道ならぬこと。(二)人  
情にはづれること。むごたらしいこと。残酷。こゝは(一)  
の意。

【辛き命】 カラきイノチ。危いのち。あぶない命。  
徒然草に「耳鼻かけうげながらぬけにけり。辛き命まうけて久  
しく病みるたりけり。」

【各、方】 オノノカタ。みなさまがた。各位。  
「各、」は多人数の場合の對稱にいふ語。かた／＼。あな  
たち。

狂言、秀句大名に「某も各、を近日申し入れうと思ふが、何

とあらう。」

【對面】 タイメン。タイム。かほをあはせること。

唐書の房喬傳に「千里外猶對面語」

竹取物語に「はや彼の御使にたいめんし給へ。」

宇津保物語、俊蔭に「なかつみの宮おはしければ、たいめし  
て物語りし給ふ。」

【ありし次第】 事の一部始終。事の子細。

【折節】 ヲリフシ。(一)ちやうどそのとき。をりから。(二)を  
りをり。時々。こゝは(一)の意。

延慶本平家物語、小松殿熊野詣の條に「太政入道二位殿は、  
をりふし福原におはしけるが」

【熊澤次郎八】 幼名は左七郎。字は伯繼、元和五年(二二  
七九)京都五條の客舎に生れた。父野尻一利は尾張の人  
で、加藤嘉明の臣であつたが、後水戸侯に仕へた。次郎  
八は外祖父守久に頼つて成立し、その跡を承けて熊澤氏  
を冒した。資性寛仁にして威嚴を具へ、文武の才幹があ  
つた。十六歳のとき、始めて岡山藩主池田光政に仕へた  
が、二十歳のとき仕を辭し、近江の桐原に住んで外祖母  
に侍し、家計窘窮の中にも孝養をつくした。二十四歳の



とき中江藤樹に就いて陽明學を學び、經世の要義に通曉した。寛永十七年(二二九〇)藤樹の推薦によつて再び岡山に召され、祿三百石を以て光政の側役となり、光政に隨つて江戸に移つた。侯伯士大夫のその英風を慕ひ、來つて道を諮ふもの殊に多く、名聲が天下に著はれた。已にして名を助右衛門と改め、番頭に列し、祿三千石を食んだ。而して藩政の大小皆これに任じ、文武教育の刷新、治水救荒の設備、交通運輸の利便、一々これを規畫經營して、藩治百年の大計を立てた。在職十八年。凡そ光政の善政・美事、一として干與しないものはなかつた。慶安二年(二三〇九)、その食邑寺口を蕃山と改稱した。翌年實子右七郎に、別に千五百石を給せられた。尋いで光政の季子輝録を請うておのれが家祿を譲り、自ら蕃山村に退隱し、因つて蕃山了介と號した。やがて居を京都に移した。公卿有志の門を叩いて教を乞ふものが續々として群を成した。次郎八は貴賤老幼を問はず、溫容を以てこれに接し、各、器によつて指導啓發し、倦むことを知らなかつた。會、所司代牧野侯は讒を信じ、次郎八を

排斥しようとした。乃ち自ら去つて吉野に隠れ、又山城の鹿背に寓し、風月を侶とした。後、松平信之の厚遇によつてその封地明石に移り、息遊軒と號した。更に信之に従つてその移封矢田に轉じた。その間なほ岡山藩主綱政のために政治の得失を陳べてその舊誼に酬い、終始渝らなかつた。貞享四年(二三四七)、將軍綱吉は、その賢を聞いてこれを江戸に召した。のち時務を痛論して建白書を呈した。事却つて幕府の旨に忤ひ、爲に信之の轉封地下總の古河に禁錮せられた。これより絶えて政事を語らず、琴書咏吟の間に老を送つた。元祿四年(二三五一)八月十七日、病に罹つて卒した。年七十三。門人故舊等、儒禮を執つて古河城外の鮭延寺に葬つた。集義和書・集義全書・大學或問・源氏外傳等の著作がある。明治四十三年十一月、正四位を追贈せられた。

【田舎】 キナカ。「田居中」の略か。都會ならぬ地。ひな。在郷。

萬葉集、卷三に「昔こそ難波のなかといはれけめ今は都とそなはりにけり。」

【まことの儒】 眞の儒者。世間の役に立つ儒者。眞儒。

法言に「如用眞儒、無敵于天下。」

「儒者」とは、孔孟の説を奉じ、四書・五經を經典とする學問、即ち儒學を講ずる人をいふ。

【隨從】 ズキジュウ。つきしたがふこと。

魏志、王粲傳の註に「時太祖適近出、瑀隨從。」

【只管に】 ヒタスラに。切に。一途に。ひたぶるに。

後撰集、秋下に「ひたすらに我が思はなくにおのれさへかりかりとのみ鳴きわたるらむ」

【佇みて】 タ、ズみて「イみて」とも書く。立ちどまつて。立ちどまつて。

古今集、秋下に「うりん院の木の陰にたゞずみてよめる。」

【よしや】 満足には思はないけれど、しかたなくうち任せておく意にいふ語。さもあらばあれ。まゝよ。

源氏物語、若紫の卷に「若しおぼしなほる折もやと、とさまかうさまにこゝろみきこゆるをいとおもほし疎むなめりかし、よしや命だに」

【いなみ難くて】 いやともいひかねて。(母の言葉を)。

「いなむ」は「否」をま行四段活用にはたらかした語。「否」

といつて承知せぬこと。こぼむこと。

竹取物語に「親ののたまふことをひたぶるにいなみ申さむことといはしさに」

【師弟の契約】 師と弟子とのちぎり。

「契約」とは、いひかはすこと。ちぎること。約束すること。

北魏書の鹿念傳に「契約既固。」

保元物語、新院御謀反思召立の條に「父子の御契約にて禮儀深くおはしましたけれども。」

【備前】 こゝは備前の岡山侯池田光政。

「池田光政」は備前岡山の城主。池田輝政の孫。世に新太郎少將といふ。はじめ播磨一國を領し、後因幡・伯耆二國を領したが、寛永九年(二二九二)備前一國及び備中數郡を食み、城を岡山に築いた。資性穎俊、學を好み、道を愛し、深く中江藤樹を尊び、その門人熊澤蕃山を聘して家士となし、國政を委した。ために國利民福が大いに進んだ。當時治を稱するものは必ず第一指を備前に屈した。天和二年(二三四三)薨。年七十四。

明治四十三年十二月、正三位を追贈せられた。



【いづれも格別のことなり】「備前侯池田光政が禮を厚くして藤樹を招いたことといひ、藤樹がこれを辭して、門人熊澤蕃山を推舉したことといひ、いづれも格別の美事で、特筆大書すべきことがらである。」といふほどの意。

9 挿 圖

中江藤樹像

藤樹書院藏の肖像の寫しである。

中江藤樹筆蹟

致<sub>ス</sub>良知<sub>ニ</sub>

藤樹書院藏

良知を十分に發揮する意。

「良知」とは、人の生れながらにそなへてゐる善良な知力といふ。

孟子の盡心上篇に「人之所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>學<sub>ニ</sub>而<sub>レ</sub>知<sub>ル</sub>者<sub>ハ</sub>良知也。」

陽明學の中心思想は實にこの「致良知」の三字に盡きる。

陽明學は、又王學ともいふ。儒學の一。支那の明時代に浙江省餘姚の人王守仁（陽明と號した）が、宋の陸象山の學說に基づいて唱道した。心外に事なく理なしとなし、心の靈明にして感應の過りなきを良知と稱する。この良知は、聖・凡共に等しく具有するけれども、凡人にあつては、多くは私慾

に障礙せられるから、その行爲が良知と一致せぬ。されば、務めてその障礙を除去して修養を怠らず、知行の合一を期せねばならぬ。これが、陽明學の要旨である。

この學は、我が國では、中江藤樹におこり、熊澤蕃山・三輪執齋・大鹽中齋（平八郎）等、順次これを傳へた。

藤樹書院 トウジュシヤケン。

滋賀縣高島郡青柳村字小川にある中江藤樹の遺蹟。藤樹が卒した後、村民はその舊宅を修理して祠廟とし、徳本堂と號した。これを謂はゆる藤樹書院である。明治十三年九月焼失したので、有志は相謀つて、舊制にのつとり、新に一字を築いた。本教科書に載せてあるのは、即ちこの建物である。

藤樹書院 伊藤東涯

江西書院<sub>ク</sub>名久<sub>ト</sub>。五十年前訓<sub>ニ</sub>義方<sub>ヲ</sub>。

今日好來<sub>メ</sub>紆<sub>ル</sub>誦<sub>ル</sub>地<sub>ナ</sub>。古藤影<sub>ハ</sub>掩<sub>ル</sub>舊<sub>ノ</sub>茅<sub>ノ</sub>堂<sub>ナ</sub>。

【いづれも格別のことなり】「備前侯池田光政が禮を厚くして藤樹を招いたことといひ、藤樹がこれを辭して、門人熊澤蕃山を推舉したことといひ、いづれも格別の美事で、特筆大書すべきことがらである。」といふほどの意。

二一 春待つ心

相馬御風

1 解 題

相馬御風著「樹かげ」の中から「春窓雜記」と題する章中の一文を採つたものである。

「樹かげ」は相馬御風の隨筆集で「自然と人生叢書」の第六篇として發行されたものである。

大正七年八月、東京、春陽堂發行。

2 作 者

相馬御風 サウマ ギョフウ。



名は昌治、越後糸魚川の人。明治十六年七月の生れ。早稻田大學英文科を卒業したのは明治三十九年である。その後早稻田大學に教鞭を執り、又「早稲田文學」の編輯に與つて、多くの創作・評論等を發表し、文壇に独自の地歩を占めてゐるが、大正十年「還元録」の一書を殘し、一家を舉

3 編纂の用意

前課に聯關して、長い間積雪に蔽はれてゐた北國の人の春待つ心のいかに痛切でまた喜悅に満ちたものであるかを述べた文をあげた。その内容とすぐれた形式とで醸し成してゐる豊潤な眞率な感は十分讀者の心を養ふに足るものがある。情操陶冶に資する教材として意義あるものである。



4 要旨

□「土に對する饑乏」——さういふ言葉が許されるならば、それを最も痛切に經驗してゐるものは雪深い北國の人々であらう。随つて又、土に對しての歡喜と感謝とを最も強く感じてゐるものも北國人であらう。また更にその事實から、特に土に對する詩或は藝術が、北國の人々の手によつて生み成され易いのも至つて自然である。現に本文がそれを示してゐるし、本文に引かれた良寛の歌、一茶の詞句がそれを示してゐる。病んで健康の貴きを知り、渴して泉の甘きを覺えるやうに、北國の白皚々たる雪の日を經過してこそ、始めて黒い大地に對する歡喜と感謝とが涌くのである。そしてそこに、土に即した人間の眞味が味識されるのである。即ち、その北國人の心持を通して、北國人ならぬ一般の人々も、人間として土に對する感謝の念を發し、土に負ふ恩恵に思ひ至るやうにしてこそ、本課を讀み得たといふべきであらう。

5 取扱上の注意

んな意味であるか。

7 釋義

【どうして無くなつたか解らぬやうに無くなつてしまつた】  
そのやうにして雪解けの水が無くなると、道の泥濘も、平坦砥の如くに乾いてゆく。全く春先きの雪消の乾くのはどしどしと進んでゆくものである。

【土が覗き始める】 土が顔を出すなどといふと同じく、活喩法である。

【田や畑の處々に見え出した黒土云々】 土に饑えてゐるのは、子供ばかりではない。人間ばかりではない。冬の寒さと食料の不足とを啣つた小鳥たちは、懐かしい土を見て全く蘇生の思がするであらう。

【むらぎもの云々】 一首の意は明らかである。「むらぎも」は「群肝」の意で「心」の枕詞。雪は冬の越後を埋めねば已まぬ。埋めてそれで満足しない。毎日々々降つて降り通して飽く時を知らない。或時は鬨々たる大きな雪となり、或時は粉々たる粉雪となつて、廣い果てしもない平野を、森を、林を、家を、すべて全く埋めてしまふ。

母なる地——Mother Earth——といひ、父を天に配するに對して、母を地に配するのは、別に事新しい話ではないが、かういふ文を讀むと、それが極めてあざやかに感ぜられて来る。尺寸の地面を踏みまはる子供、斑點の黒土に降り立つ鳥の群、首をもたげる若草を見れば全く涙ぐましい感が涌く。その子供の歡はやがて大人の歡でもある。その鳥の歡、若草の歡は、やがて人間の歡でもある。即ち自然の歡は人生の歡である。かくして土を通して自然と人生との一體を感じ、かくして土に對して無限の親しみを覺える。大體かうした意味合で取扱はれたらばと思ふ。そしてこの意味合は北國人でなくとも味識することは出来るのである。

6 設問

- 1 この文の作者が、主として敍べようと思つてゐるのは、どういふことであらう。(人間の土に對する親しみ)
- 2 この文を書いてゐる作者の氣分は、どんな風に想像せられるか。
- 3 「生そのものの味はひ」とあるが、その「生」とは、ど

時には寒い風と一緒に降つて来る。風がひゅう／＼と高い山から叫び狂つて下りて来ると、雪も縦横に暴れて吹き雪が亂れて降る。こんな時には一寸さきはもう灰色になつて何も見えなくなる。若し又隙間でも見出したら、それがどんなに小さくとも容赦なく家の中へ吹き込んで、陰暗と寒氣とにすべての物を壓迫する。いやが上にも壓迫しなければ已まない。

かうした日が幾日も續き幾月も續いて殆どその壓迫に堪へ兼ねる頃、時々明るい太陽や青い空の一片を陰暗な灰色の雲の間からちらりと見る事がある。さうすると始めて彼北國人の心は復活の曙光を認めて再び意氣を恢復する。やがて雪が消え始めて、珍しくも小鳥の聲を聞き、そのまめ／＼しい姿を見ると、久しく別れた親に偶然廻り逢つた時より更に／＼嬉しく楽しくなる。良寛禪師などには一層この感が深からう。こんな時の心持は南國人には味はひ難いものと思はれる。この歌は萬葉調である。

【良寛】 リャウクワン。越後國出雲崎の生。學徳兼備の高僧で、逸話が多く世に傳はる。殊に和歌を能くし、好ん



で萬葉調を詠じた。書は懷素の趣があり、就中草書は殊に飄逸不群、龜田鵬齋も大いにこれを稱讚した。

その詩にも三隱の妙味がある。岡鹿門翁は嘗て十餘首を選んで北越遊乘に收めた。その詩集は二種ある、一は草堂集といひ、他は良寛道人遺稿と言ふ。

その平生は、彼が嘗て「生涯懶立身、騰々任天真。」といつた如く、全然、行雲流水に終り、敢て法幢を立てもしなかつたが、その常惺常樂の心地と慈悲忍辱の本行とは、日常の動作と諷詠・翰墨の間とに流露してゐる。

【長々の月日、云々】この語、七番日記には見當らぬ。出所はなほ考へよう。

「やをら」は、徐々に。そろ／＼。

【落】フキ。菊科落屬の多年生草本。高さは二尺餘。葉は圓い腎臓形で、長い葉柄を有する。花莖は尖つた長卵形の葉を有し、頂に數箇の頭狀序を有し、花は皆筒狀花冠をもつてゐる。

【蒲公英】タンポポ。菊科の多年生草本。花莖の高さは七八寸。葉は叢生し、やゝ倒披針形で、下向せる大鋸齒が

ある。早春葉間に花莖を抜き、黄色の頭狀花序をなして莖頂に開く。

【一茶】イッサ。信濃の俳人。姓は小林、通稱は彌太郎。俳諧寺又は蘇因坊等の號がある。

寶曆十三年(二四二三)信濃國水内郡柏原村に生れた。幼時母を失ひ、繼母に久しく苦められた。よつて自ら嗣を避けて早く風雅に身を委ね、江戸に遊ぶこと十年、下谷坂本に住した。俳諧寺はその時つけた號である。

文化十一年(二四七四)國に歸り、文政十年(二四八七)十一月十九日歿した。年六十五。柏原の明專寺に葬つた。性質が磊落で、崎行のあつた事は人の知る所である。

その俳諧は脱俗洒落、自ら新機軸を出した。自筆の集を「おらが春」といふ。盛に世に行はれてゐる。

【あづさ弓云々】

「訪ひてまし」は、佐佐木信綱氏の「近世和歌史」に「とく出で來ませ」とある。その方が正しからう。教科書のは筆蹟の讀み誤ででもあらうか。

「あづさ弓」は「春」の枕詞。弓は張るものゆゑ、春にかけ

たのである。

「草の庵」は良寛の住居なる國上山の五合庵。

ませは「ます」即ち動詞「います」の命令。

一首の意は、「春になつて雪が消えたならば、この草庵を一日も早く訪れて下さい。逢ひたくて仕方がないから。」といふのである。

【極致】キョクチ。その趣をきはめ盡くしたこと。極所。

又、最も奥深いむもむき。

【北國の住民の春を待つ心には生そのものの云々】こゝはこの文章の山である。そして、それが結びである。

文法・修辭法について

枕詞は我が國語の獨得なる修辭法である。枕詞から次の語にかゝる間に極めて輕妙な思想の轉換が行はれる所に言ひ知れぬ味はひがある。枕詞の起源等は明らかでない。意味も、わかるのもあれば又わからないものもある。たゞ音調上の技巧より生じたものも亦少なくない。

又一種の枕詞には掛言葉の遊戯より發達したものもある。即ち、梓弓春(張)の如きはその一例で、今の言葉で

言へば「早鐘の神(カン)田の町に」、或は「飯食ふや日本橋(二本箸)」など言へば言はれるやうなものである。これは明治の初年、井上祝園などの説の中にも見えてゐる。



# 二三 鎌倉

正岡子規

## 1 解題

子規全集卷十、紀行篇の中に見えてゐる「鎌倉一覽の記」の冒頭及び結文を節略して一課の教材としたものである。今参考のため節略されてゐる部分を左に掲げる。

### 冒頭

面白き朧月のゆふべ、柴の戸に立ちいでてそゞろにありけば、まぼろしかと見ゆる往來のさまもなつかしながら、都の街をはなれたるけしきのみ思ひやられて、新橋までいそぎぬ。終りの列車なるに、はや乗れといふに、われおくれじとこみ入れば、春の夜の夢を載せて走る汽車二十里は、煙草の煙のくゆる間にごありける。

蛙鳴く水田の底の底あかり

藤澤の旅籠屋を敲いて一夜の旅枕と定む。朝とく目さむれば、裏の藪に鳴く鶯の一聲二聲もうれしく、

鶯やおもて通りは馬の鈴

鶯や左の耳は馬の鈴

いづれがよからん。蕉風・檀林のけちめにやなど思ふも、脛上の沙汰なるべし。一番の汽車にて……とつゞく。

## 文末

梅が香にむせてこぼるゝ涙かなの次に、

泣くく、鎌倉を去りて再び歸る俗界の中に筆を採りて、鎌倉一見の記とはなしぬ。(明治二十六年三月)とある。

「子規全集」(シキゼンシフ)は全十五卷。正岡子規の俳句・和歌・俳話・歌論・隨筆・紀行・書簡等を輯めたもの。大正十三年、東京市小石川區表町、アルス社發行。

## 2 作者

正岡子規 マサヲカ シキ。



名は常規、慶應三年(二五二七)伊豫國(愛媛縣)御徒町に生れた。父隼太は藩の馬廻加番を勤めてゐた。十八歳の時近郷三津濱の其戎翁に就いて俳句を學び、又幼より祖父にして儒者なる大原觀山に教へられた。中學



時代には演説練習會に出て雄辯を振つた。かくて新古の想は早くも彼の頭腦の中で融合を始めたらしい。やがて上京して大學豫備門に入り、ついで大學に入った。その頃既に肺を病んでいたので、氣永に學業に親しむの不可能なるを自覺し、一面前々からの俳句の趣味が頭を擡げて来たので、終に斯壇の革新を以て限られた短生涯の唯一の天職と思ひ込むに至つた。俳句を子規と名のつたのは、咯血後の事である。この俳句によつても、悲壯な決心のほどがうかがひ知られる。在學二年にして大學を退き、叔父の紹介によつて日本新聞の陸羽南に接近し、その新聞の一欄に俳話を掲げ、俳句を募集した。ところが、意外にも共鳴者が多く、暫くのうち一大勢力となり、在來の月並派や秋聲會などは全く後へに墮落たるの觀があつた。謂はゆる「日本派」なる俳團はかくして新興俳句の旗幟となつたのである。二十七年「小日本」を發刊してその主筆となつた。二十八年日清戰役に從軍してこれが爲に病勢を募らせ、二十九年春髓病を併發して愈々たゞならぬ病態となつたが、それでもなほ屈せず、益々奮勵努力をつづけ、三十年の頃門人柳原極堂が雑誌「ホト、ギス」を東京に移してからは、同誌の中心となつて執筆した。俳壇の既に彼に風靡した頃、餘力を歌壇にそそぎ、大いに萬葉風を鼓吹して織巧な匠氣を排斥し、「萬葉集並に萬葉風の歌人の詠を味讀せよ。」と叫んだ。「九たび歌人に與ふる書」は、當時その意見を披瀝したものである。又「ホト、ギス」の誌上で寫生文の文學的價値を高唱し、自ら多くの佳篇を作つた。その句は始め芭蕉に私淑したが、ついで蕪村に渴仰し、これに新

趣味を加へて自家獨得の句風をはじめ、連句を却けて専ら俳句を勤めた。歌でも文でも、彼は、すべてその理論づけをするだけのものを、實地の作品によつて示してゐる。彼はその上に、繪もかき、字も上手であつた。その筆致は雅味に富み、素材掬すべきものがあつた。門人中特に名あるものは河東碧梧桐・高濱虛子・寒川鼠骨・松瀬青々・坂本四方太・伊藤左千夫・長塚節等で、著書のおもなものは觀祭寄屋俳話・子規隨筆・續子規隨筆・芭蕉雜談・蕪村句集・論講・新俳句・俳諧奇調集・病床六尺・墨汁一滴等である。これらの著作はいづれも子規全集中に收められてゐる。

要するに子規は新俳句を提唱し、これをして明治の文藝としての一地步を確立せしめ、萬葉ぶりを獎勵して後のアラ、ギ派を起し、寫生文を唱へて新文體を鼓吹し、全人格的に文藝生活に生きた一偉人である。

### 3 編纂の用意

明治時代の俳聖ともいはれる正岡子規の筆に成る鎌倉遊覽の記を讀ましめて、湘南の名區たる鎌倉の人文・地文に關する知識を豊富ならしめると共に、典雅輕妙なる紀行文の筆致を味ははしめ、且文中に散見する俳句及び和歌を講説して、作者の豊かな歌想・俳想を偲ばしめた

。

### 4 要旨

春の鎌倉に行遊した三日間の感想を、或は俳句を挿入し、或は和歌を加へて綴つた文である。無雜作に見える行文の裡に、自由にして悠々たる作者の俳諧的詞藻を窺ふべく、又、史蹟としての鎌倉に對して、懐古の情を抒べたところには、一種豊かな史的興趣を味はふべきである。

### 5 概説

第一節（一三三頁—一三五頁五行） 作者が鎌倉に遊んだその日の晝間の吟行を録した。  
 第二節（一三五頁六行—一三七頁一行） その夜の事及び翌日の行遊・感想を記した。  
 第三節（一三七頁二行—一三八頁） 第二夜から又その翌日にかけての吟懷を敘した。

### 6 取扱上の注意

□日時を以てこの文の段落を考へると、「概説」に示したやうに切られるが、必ずしもこれを教授の單元としないで

もよからう。作者は極めて自由に筆を行つてゐるので、その氣分を受取らせるためには、取扱方にも捉はれるところがあつてはならない。

□作者自ら「駄句の数々」と言つてゐるが、こゝに吟じ出された俳句は、いかにも即景・即興・即吟で、作者としては、經營苦吟の結果ではあるまい。しかし、そこに又作者の俳想の豊かさを見るべく、吟出の自由さを窺ふべきである。何れにしても、こゝに吟ぜられた程度の俳句には、非常に深い、むづかしい味はひがあるといふのではない。例の「打興する」といふ程度のものである。さればといつて、中學の一年生に、この俳句の趣味が果してよくわかるかと言ふに、必ずしも然りとは答へられまい。やはり、教授者の指導に待つべきものが多い。

□「坐禪觀法」とか、「數百年の夢幻何とか觀じ給ふらん」とかいふ語句なども、その説明に特別の用意が必要であらう。

□「上の句置煩へる」の處では、和歌・俳句等の作られるときの過程を語り聽かすべきである。即ち歌でも俳句でも、



その創作にあつては、必ずしも初めから完全を求むべきではなく、思ひついたことを、一言でも半句でも書きつけておき、後にそれを完全なものにするといふ心掛が必要である。この隠士の場合は、下の句だけ調子よく出来たが、上の句が未成であるといふのである。

7 設問

- 1 「駄句」といふ語の反対語は、何といふか。(名句)
- 2 こゝにあげてある俳句の中で、諸子の最も好きものをいつて見よ。
- 3 次の語句の意義を問ふ。  
イ とつおいつ語る。  
ロ 古梅や、盛を過ぎて、散りがてなるもあはれなり。  
ハ 數百年の夢幻何とか観じ給ふらん。  
ニ 興亡の感くさんゝに起りて、そゞろに胸を衝く思なり。
- 4 作者は鎌倉に幾晩泊つてゐるか。
- 5 次の語の読み方を問ふ。  
瑞垣。奥都城。陽炎。發句。額づく。減る。訪ふ。

8 釋義

【鎌倉】神奈川縣鎌倉郡鎌倉町。三浦半島の基部、相模灣の支灣たる由比ヶ濱に面し、鐵道横須賀線の驛がある。又江ノ島電鐵線は片瀬を経て藤澤に通じてゐる。文治元年(一八四五)、源頼朝が始めて幕府を開いた所。爾來約百五十年間鎌倉文化の中心をなした。室町時代には、その初期に關東管領をこゝに置いて東國を治めたが、兩上杉氏の擾亂後頗る荒廢し、徳川時代を通じて甚だ振はなかつた。明治に至つて、東京人士の遊覽・避暑・避寒地として、又好海水浴場として繁榮を來した。鶴岡八幡宮・鎌倉宮・源頼朝墓・長谷寺・長谷大佛・建長寺・圓覺寺等、名所や古蹟が町の内外に散在し、轉、往年の規模を偲ばしめる。  
【駄句】 ダク。つまらぬ句。拙劣な句。こゝは俳句にいふ。「俳句」は俳諧の句。發句(ホクク)。連歌の初句十七字(五、七、七、五)より轉じて一體を成したるもの。  
【岡あれば宮云々】 「岡の在るところには必ず宮があり、宮のあるところには必ず梅の花がそのまはりに咲いてゐる。」といふ意。

【家一つ梅五六本云々】 「五六本の梅の木で圍まれてゐる家が、こゝにも、こゝにもある。」といふ意。

【旅なれば春なれば云々】 「さても心地よいこの朝ぼらけの景色かな。旅なればこそ、春なればこそ、このやうな心地よい朝ぼらけをめではやすことが出来る。」といふほどの意。

「朝ぼらけ」は、朝ほのくゝと明るくなつた時。夜あけがた。あかつき。

古今集、冬に「朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪。」

枕草子卷二に「あさぼらけの、いみじう霧みちたるに」

【由比濱】 ユヒガハマ。神奈川縣鎌倉町の海岸。西、稻村ヶ崎から、東、飯島崎に至る間にある遠淺の濱。附近には京濱名士の別荘が多く、海水浴場として名高い。

【隠士】 インシ。世をのがれて山林などに隠れ住む人。隠者。この隠士の何人なるかは未詳。

左思の詩に「杖策招隠士」

賀古教信七墓廻卷二に「茲に當所の隠士高梨吉内左衛門友重は……」

【とつおいつ】 「取りつ置きつ」の音便。あれこれと。とかくと。

【發句の噂】 ホククのウハサ「發句」についてはなし。

「發句」については、前の「駄句」の條参照。

【噂】は、(一)世間に言ひふらす話。風説。風聞。世評。(二)或物事又は人の上などについての話。こゝは(二)の意。狂言、素襖落に「こちのたのうだ人の噂を聞かせられたか。」

【即景】 ソクケイ。目に見た景色をすぐその場で詩文に作り、又は和歌・俳句などによみなすこと。

【陽炎や小松の中の云々】 小松の中の古すゝきから、陽炎のちら／＼と立ちのぼつてゐるさまをよみいでた句。

「陽炎(カゲロフ)とは、のどかな春の空などに、ちらちらと立ちのぼる氣。かぎろひ。かげろひ。いとゆふ。

源氏物語、蜻蛉の卷に「ありと見て手にはとられず見ればまたゆくへも知らず消えしかげろふ。」

「古すゝき」は、去年の枯すゝき。

「すゝき」は、芒とも薄とも書く。禾本科芒屬の多年生草本。年々宿根から莖や葉を抜き、高さ五六尺に達する。



葉は細長くて尖り、平行脈を有して、その質が堅い。秋季莖頭に穂状花序の花を開く。花序は數個簇生し、黄褐色を呈する。その形が獸の尻尾に似てゐるので、俗に尾花といふ。その莖や葉は屋根を葺く料に供する。

【春風や起きも直らぬ云々】 磯馴松が春風に靡いてゐるさまをよみ出でたもの。

【磯馴松】(ツナレマツ)とは、枝や幹が磯などに生ひ延びて、年を経た松。枝や幹などの生ひのびた松。

散木集、祝に「いは走る瀧のそともそなれ松かげをならべて幾代經ぬらむ」

【ふらく】 目的なくあるさまはるさま。又、軽く飛びあがるさま。

宇治拾遺物語、卷三に「雀ふらくと飛びていぬ。」

【浮かれ出づ】 どこといふあてもなしに家を出ること。

十訓抄、卷中に「妻にて候女の心ばへけしからぬによりて、過ぐべくも覺えず候間、うかれいでて候ふなり。」

【繩手傳ひ】 ナハテツタひ。繩手をつたつて行くこと。

【繩手】は、又、嘸とも書く。田の中の道。あぜみち。たんぼみち。

和名抄、卷一に「嘸、奈波天、田間道也。」  
元可集、秋に「霧むすぶ小田のなはてのかりしほも靡く穂なみの色に見えつ、」

【行くともなしに】 行つたとも思はぬうちに。知らず識らずのうちに。

【鶴岡】 ツルガワカ。鶴岡八幡宮。國幣中社。俗に鎌倉八幡といふ。神奈川縣鎌倉町雪の下に鎮座。祭神は應神天皇。配祀は仲哀天皇・神功皇后。康平六年(一七三)源頼義が男山八幡を油比(ユヒ)郷に勧誘したのに始まる。頼朝の時に至つて現地に遷座。爾來源氏の氏神、武家の守護神として尊崇せられ、鎌倉時代はもとより徳川時代にも厚く保護を加へられた。今の社殿は徳川時代の建築にかゝる。その一の鳥居(石造)は特別保護建造物に指定せられてゐる。例祭は九月十五日。

【銀杏を撫で】 その昔、源氏の第三代將軍實朝が承久元年(一八七九)その甥公曉(クゲウ)のために弑せられた遺蹟として名高い八幡宮前の石段のわきにある銀杏の木をなでまはして。

「銀杏」イテフは公孫樹科に屬する喬木。扇形の葉を有し、一年内に脱落する。種子は白色で核果状をなす。木材は種々の用に供し、種子即ち銀杏(ギンナン)は食用に供する。又觀賞用としても栽培せられる。公孫樹。鴨脚樹。

【廣前に額づきたる後】 大前に拜禮した後。

【廣前】(ヒロマへ)は、神の御前を特に尊んでいふ稱。おほまへ。

祝詞式、春日祭に「皇神等能廣前仁白久。」

【額づく】(ヌカづく)は、額(ヒタヒ)を地につけて拜禮すること。拜禮。頓首。叩頭。

宇津保物語、嵯峨院に「ありとある人は、立ちなみてぬかづく。」

【瑞垣】 ミヅガキ。神社の周圍に設けた垣。いがき。和名抄、卷十三に「瑞籬、美豆加岐。」

【散りがてなるもあはれなり】 古梅の花が、散りにくさうにしてゐるさまも、興が深い。

「がて」は、動詞に添うて爲し難き意をあらはす語。

萬葉集、卷五に「鶯の待ちがてにせし梅の花散らずありこそ思ふ子がため」

古今集、夏に「夜やくらき路やまどへる時鳥わが宿をしも過ぎがてに鳴く」

【銀杏とはどちらが古き云々】 「これ櫻の花よ、おまへとあの銀杏の樹とは、どちらが年をとつてゐるのかね。」といふほどの意。



【建長寺】 ケンチャウジ。臨濟宗建長寺派の大本山。山號は巨福山。鎌倉郡小坂村山の内にある。鎌倉五山の第一。北條時頼の開基。大覺禪師蘭溪道隆の開山。建長五年(一九一三)竣工。佛像には丈六の地藏及び別に千體の同像を安置する。その寺寶には國寶が多い。

【堂宇】 ダウウ。堂ののき。又堂即ち神佛を祀る建物。洛陽伽藍記に「放光明輝于堂宇。」

世説の棲逸に「芳林列於軒庭、清流激于堂宇。」

【松杉若滑らかに】 松や杉の幹に生えてゐる苔がすべくしてゐるさまの形容。

「滑らか」は、すべくしてゐるさま。つる／＼してゐる



さま。

太平記卷三、陶山小見山夜討の條に「古松枝を垂れ、蒼苔露滑らかなり。」

【陽炎となるや減り行く云々】「建長寺の古い柱が、年と共に次第に細くなるのは、陽炎となつて減つて行くためであらうかしら。」といふほどの意。



【圓覺寺】エンガクジ。神奈川縣鎌倉郡山内村にある名刹。山號は瑞鳳山。臨濟宗圓覺寺派の大本山。弘安五年（一九四二）北條時宗が宋國の制に擬して創建したもの。宋の僧祖元（佛光禪師）を開山とした。應永・永

祿の二度炎上し、寛永二年（二二八五）に再建した。大正十二年の關東大震災に諸堂が多く倒壊し、古建築物としては一字の舍利殿（特別保護建造物）が残存してゐるだけである。

【木立】コダチ。生ひ立つた木。たちき。

源氏物語、明石の巻に「作りなしたる心ばへ、木立・立石・前栽などのありさま」

【草屋】クサヤ。草葺の家。茅（カヤ）などで屋根を葺いた家をいふ。

【薬屋】ワラヤ。薬葺の家。稻藁・麥藁などで屋根を葺いた家をいふ。

【坐禪觀法】ザゼンクワンポフ。坐禪をして法を觀すること。

「坐禪」とは、靜かに黙坐して悟道を求めること。多く禪家で行ふ。

佛國記に「香園窟山、有石窟南向。佛本於此坐禪。」續日本後記卷一、四年三月己未の條に「道昭……還住禪院。坐禪如故。」

「觀法」とは、心中に明瞭に眞理を觀察すること。

摩訶止觀に「觀法雖正、著心同邪。」

太平記卷二、三人僧徒關東下向の條に「上人……獨を挑けて觀法定坐せられて候。」

【心を澄ます】心を洗ひきよめること。心のにこりをなく

すること。

【若人】ワカウド。ワカビトの音便。年の若い人。青年。こゝは青年の參禪者をさしていふ。

宇津保物語、藏開、下に「そわりの君とてよきわかうど、あて宮の御方にさぶらふ。」

【殊勝】シュショウ。けなげ。神妙。奇特。

大無量壽經に「超發無上殊勝之願。」

【由比の浦波】由比の浦邊に打ちよせる波。

萬葉集、卷六に「朝風に浦波さわぎ」

【夜一夜】夜どほし。終夜。夜もすがら。

土佐日記に「日ひと日、夜ひと夜、とかく遊ぶやうにて明けにけり。」

【寢心】ネゴコロ。ねた心もち。睡眠中の心もち。

今昔物語、卷二十七に「寢心にもきと覺えて、驚くまゝに起きあがりてとらへつ。」

【曙】アケボノ。夜がほのくくと明けようとするとき。しらしらあけ。しのゝめ。

枕草子卷一に「春はあけぼの、やうく白くなりゆく山ぎは少しあかりて、紫だちたる雲の長くたなびきたる。」

【星月夜の井】ホシヅクヨの井。鎌倉の名所。鎌倉十井の一。鎌倉町坂の下にある。



大日本地名辭書に、「新志にいふ、星月夜井は極樂寺の切通へ上る坂の下にあり。里老いふ、昔この井の中に星の影

見えし故に名づく。後世菜刀を井に落したるより、その影見えず。傍に星井寺虚空藏堂あり。その縁起に、天平中にこの井光あり、里民不思議に思ひ、これを見れば、井の邊に虚空藏の像現し給へりとあり。後堀河百首、常陸が歌「われひとり鎌倉山を越えゆけば星月夜こそうれしかりけれ。」又法印堯慧が北國紀行に「極樂寺へ至る程に、いと闇き山際に、星月夜といふところあり、昔この邊に星御堂とて侍りきなど、古き僧の申し侍りしかば、歌に、今もなほ星月夜こそこのらめ寺なき谷の闇の燈」とあり、星御堂とは虚空藏堂のことなり。」とある。

【鎌倉は井あり梅あり云々】「鎌倉には有名な星月夜の井



もあり、又多くの梅の木もあつて、謂はゆる星月夜のけしきが殊の外によい。」といふほどの意。  
「星月夜」とは、星の光が月のやうにかゞやいて見える夜をいふ。

永久百首、雜に「われひとり鎌倉山を越え行けば星月夜こそうれしかりけれ。」

【長谷の観音堂】 鎌倉町長谷にある眞言宗の名刹。山號は海光山。坂東三十三所第四番の札所。本尊は二丈六尺の十一面觀音像で、佛師春日の作。大和國長谷寺の觀音像と同木異工の作と傳へられてゐる。

觀音は觀世音の略。菩薩の名。梵語 Avalokitesvara (阿縛盧枳低濕伐羅) の舊譯で、一に光世音ともいひ、新譯では觀自在といふ。淨土教では勢至菩薩と共に阿彌陀如來の脇侍として慈悲の權化となし、法華經普門品にはこの菩薩が三十三身を示現して普く苦惱の衆生を度脱することを説いてある。その淨土は南海の補陀落山であるといはれ、十方の國土に身を現じ、衆生がこの菩薩の名號を稱へれば、直にその聲に應じて解脫を得しめるといふ。この行化の相形は多種多様で、六道に配しては六觀音となる。その他、七觀音・三十三觀音等

の種類がある。

【歌にせん何山彼山云々】 「そよ吹く春風をあびてゐるあの山、この山のけしきを歌によんで見たいものだ。」といふほどの意。

【日蓮】 ニチレン。日蓮宗の開祖。安房國(千葉縣)東條郷(今の小湊)の漁夫貫名(ヌキナ)重忠の第二子。十二歳にして清澄山に登り、道善を師として天台・眞言を學んだ。長じて西遊し、南都・北嶺の諸碩學を訪うてその奥旨を極めたが、法華經のみ末法の今時に弘通すべき妙法であつて、他は釋尊の眞意でないと感じ、この主義を以て世を救はうと決心した。建長五年(一九一三)故郷に歸省し、清澄山に上り、四月二十一日東天旭日を拜して南無妙法蓮華經の題目を高唱した。これを一宗開創の起源とする。爾來他宗のものを謗法の徒として折伏し、當時の天災地變を以て官府が謗法の邪宗を信じて法華經を信じないためであると主張し、「守護國家論」「立正安國論」を作つて幕府を諷刺した。幕府の執權北條時頼は大いに怒り、妖言を以て民衆を惑はすものとして伊豆に流した。

然るに日蓮の所説に隨喜して或はその弟子となり、或は外護(ゲゴ)の檀越(ダン)となるものが少くなかつた。文永八年(一九三一)將に龍口に斬られようとしたが、危く赦されて佐渡に流された。のち「開目鈔」觀心本尊鈔を作つて故國の信徒に寄せ、又十界勸諭(ジウケン)の大曼荼羅を圖顯して一宗の本尊とした。同十一年赦されて鎌倉に歸り、再び幕府を諷刺したが、容れられなかつた。のち去つて甲斐國身延山に入り、専ら門弟の養成及び教義の闡揚に努めた。弘安五年(一九四二)病を得、その十月十三日、武藏國池上に入寂した。年六十一。門弟日昭・日朗等を六老僧といひ、日法・日家等を十八中老僧といふ。これらの門弟が師の著述及び書翰を輯録したものを録内・録外の御書といふ。

【高弟】 カウテイ。多くの弟子の中で特にすぐれたもの。高足。

史記の禮書に「子夏門人之高弟也。」

【日朗の土窟】 日朗が鎌倉幕府のために投ぜられた土窟。

「日朗」(ニチラウ)は日蓮門下六老僧の一。大國阿闍梨と

號し、また筑後坊といつた。十歳にして日蓮に投じ、爾後

常に日蓮に隨侍した。文永八年(一九三一)日蓮の龍口の厄難に際し、自らこれに殉ぜんことを強請して刀吏と争ひ、右臂を折られた。日蓮が佐渡に流されたとき、日心等と共に土牢に幽せられた。十一年日蓮に赦免の令が下るや、その赦免狀を携へて佐渡に日蓮を訪ひ、相伴なつて鎌倉に歸つた。日蓮が身延に退くに際し、命を受け、後又池上本門寺を兼監した。建治三年(一九三七)下總の日禮は一字を建て、日朗を請じて開山とし、本土寺と號した。日蓮の滅後、同門の五人と共に身延に祖塔を守つた。元應二年(一九八〇)寂。年七十八。門弟中日像・日輪・日傳等九人を朗門の九鳳(九老僧)といふ。後光嚴天皇は勅して菩薩の號を賜はつた。「土窟」(ドクツ)は土中のむろ。つちあな。土牢。

神仙傳に「造土窟居之。」

【案内】 アンナイ。しるべ。てびき。

【大佛】 謂はゆる鎌倉の大佛。鎌倉町長谷高德院の庭中に露坐する阿彌陀如來の銅像。長谷の大佛ともいふ。淨光



上人が寛元元年（一九〇三）に建造したものは木像であつたが、後、建長四年（一九二二）改めて金銅の佛像に鑄直した。鑄工は丹治久友。相貌圓滿、我が國大佛中の逸品と稱せられてゐる。高さ三丈五尺、その大きさに於ても奈良の大佛に次ぐ。應安二年（二〇二九）の大風及び明應四年（二一五五）の津波のために佛殿が破壊されて、今なほ露佛となつてゐる。大正十二年の關東大地震に臺座の前面が三〇種ほど沈下し、佛像は前方にやゝ傾いたが、今は修理された。その胎内に觀世音の像が安置されてゐる。

【數百年の夢幻何とか觀じ給ふらん】 數百年間のはかない人生のさまを何とお觀じになつてゐるであらうか。

【夢幻（ムゲン）は、ゆめやまぼろし。人生の物事のはかないことにたとへていふ。

金剛經に「一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀。」

「觀ず」とは、心中に明らかに眞理を觀察すること。

延慶本平家物語、卷二中、前中書王の條に「自ら一乘圓頓の

眞文を書寫し、閑かに生死無常の哀傷を觀じ給ひて。」

【大佛のうつら／＼と云々】 「あれ、大佛さまが、うつらうつらとぬねむりをしていらつしやる、さても長閑かな春日であるはい。」といふほどの意。

【浪音高し潮や満つらん】 和歌の下の句。「浪の音がたいそなたかい、定めて潮が満ちたのであらう。」との意。

【頻にシキリに。ひつきりなしに。しげ／＼と。】

【口ずさみて】 口にとなへて。

【口ずさむ】とは、詩歌などを、ふと心にうかんだまゝ唱へること。

源氏物語、若菜の卷、上に「なほ残れる雪と、しのびやかに口ずさみ給ひつゝ。」

【上の句置煩へる隠士の聲云々】 歌の上の句を置くに當惑してゐる隠士の聲が、次第にかすかになつて。

【雪の下】 鎌倉町の大字。鶴岡八幡宮の南なる大路の邊をいふ。元は八王寺谷の一名であつたが、後世村の名に轉じ、横大路から若宮大路の邊を指していふやうになつた。即ち扇谷今大路の東、小町の西の一區域である。

【古跡】 コセキ。故迹とも故蹟とも書く。昔物事のあつた

あと。歴史上の遺跡。舊跡。遺蹟。

漢書の溝洫志に「常欲求索九河故迹、而穿之。」  
狂言、鈍根草に「道すがらの名所・古跡があらば語れ。」

【興亡の感】 コウバウのカン。古英雄などの或は興り或は亡びたことについての感慨。こゝはおもに鎌倉を中心として活躍した源氏・北條氏等の興亡についての感慨をさしていふ。

歐陽修の文に「嗚呼夫治亂興亡之迹云々。」

【くさ／＼に】 いろ／＼に。さまざまに。種々に。  
萬葉集、卷十九に「秋の花くさ／＼なれど色毎に見しあきらむる今日のたふとき」

竹取物語に「このかはごろもいれたる箱を見れば、くさ／＼の麗しき瑠璃をいろへて造れり。」

【そゞろに】 「すゞろに」に同じ。何故ともなく。覺えず知らず。知らず識らず。

枕草子、卷一に「霞も霧も隔てぬ空のけしきの、何となくそゞろにをかしきに」

【胸を衝く思】 つよく胸をうつやうな思。

【高殿の三つば四つばの云々】 「高殿」は、高くつくりなし

た殿舎。「三つば四つば」は、「三間四間」の義。「間」はここでは棟のことをいふ。即ち壯麗な建物の三棟・四棟と建ちつゞいてゐるさま。「二葉」は、草木の芽だしの二枚の葉。

催馬樂、此殿に「この殿はうべも富みけり、さきくさの…みつばよつばの中に殿づくりせり。」

源氏物語、早蕨の卷に「月もかどやく心地する殿づくりのみつばよつばなる。」

宇津保物語、吹上に「昨日まで二葉の松と聞えしを陰さすまでになりけるかな。」

一首の意は、「そのむかし高殿が三棟四棟と立派に建ちつゞいてゐたあとをおとづれると、どこもかしこもあれはてて、春草の二葉のちらほらと芽ばえてゐるあたりに、ひばりがびい／＼と鳴いてゐる。」

【いつの世の庭のかたみぞ云々】 「身分のいやしいものに住んでゐるあばらやの垣根つゞきにかんばしくにほうてゐる梅の香は、いつの世の庭のかたみであらうかしら。」といふほどの意。

【かたみ】は形見。昔あつた物事などを思ひ出させる種と



なるもの。又、記念として残した品物。

古今集、卷上に「梅が香を袖にうつしてとどめてば春は過ぐとも形見ならまし。」

「賤が家」(シツガヤ)は、身分のいやしいものの住んでゐる家。

堀河百首、夏に「いなしきのことぞとはげに言ひながら蚊遣火たてぬしづかやぞなき」

【頼朝の墓】鎌倉町法華堂址の背後の丘陵にある五輪の塔。教科書の挿圖参照。

鎌倉舊蹟地志に「今法華堂後の山上に五輪の塔(高さ五尺餘)一基を建つ。塚塚談に「予十七歳のとき、鎌倉に右大將家の墓所に参詣せしに、長さ三尺ばかりの苔むしたる五輪の塔なりき。然るに薩州の太守(烏津侯)小石塔を見苦しと思ひ給へるにや、安永元年に八九尺の五輪の塔に建せられたり。薩州先祖の墓も東の方二三十間奥にありけり。同時に建直し給ふ。日本總追捕使頼朝の墓の小石塔を、そのまゝに置き給ふときは、古昔の質素の證述にして諸人の教訓ともなるべきに、建せられたまふは餘り心なき事ともいふべし。」と見え、ある。

【頼朝】は源氏。鎌倉幕府第一代の將軍。義朝の第三子。平治の亂のとき、年十三、父兄に従つて頗る戦功を立てた。軍遂に敗れ、平宗清に捕へられたが、清盛の繼母池禪尼の請によつ

て死を免れ、伊豆の蛭ヶ島に流された。爾來蟄居二十餘年。治承四年(一一八四〇)高倉宮以仁王の令旨を奉じて兵を擧げ、伊豆を略した。不幸大庭景親と戦ひ石橋山に敗れて安房に逃れたが、やがて再び勢を得て關東を服し、居を鎌倉に構へた。後、二弟範頼・義經を遣はして義仲を誅し、尋いで平氏を一谷・屋島に攻め、これを境、浦に滅した。幾ばくもなく弟義經と隙を生じた。頼朝はこれを機として諸國に守護・地頭を置き、文治五年(一一八九)奥州に藤原泰衡を討滅し、終に天下を統一した。建久元年(一一五〇)入京して權大納言に任じ、右近衛大將を兼ねたが、間もなく職を辭して鎌倉に歸つた。翌年前右大將家として諸役所を置き、幕府の職制を整へた。同三年征夷大將軍に任ぜられた。正治元年(一一八九)正月薨。年五十三。世に鎌倉殿、又鎌倉右大將といふ。

【蔦】ツタ。葡萄科地錦(ツタ)屬の多年生草木。蔓莖を有し、吸盤を具へる卷鬚によつて他物に攀縁する。葉は卵狀圓形又は心臟形で、掌狀に淺裂し、或は全く羽狀複葉をなす。春夏の際淡黄色の花を葉腋に叢生し、後黒色球形の小漿果を結ぶ。我が國各地の山野に自生する。間、觀賞用として栽培することもある。

【苔むしたる五輪の塔】苔のはえた五輪の塔。「むす」は「生す」「産す」などの意。成り出でること。生え

ること。生れること。生ひ出でること。

萬葉集、卷十八に「海ゆかばみづく屍山行かば草むす屍」

同、卷一に「川上のゆつ岩むらに草むさず常にもがもなとこ少女にて」

【五輪の塔】(ゴリンのタフ)は、最頂を如意珠形とし、次を半月、次を三角、次を圓、次を方とした五段の塔。略して五輪ともいふ。(教科書の挿圖参照)

太平記、二十六、執事兄弟寄修の條に「當家の父祖代々この地に墳墓を占めて五輪を立て、御經を奉納したる地にて候へば」

【日本總追捕使】日本全國の總追捕使を總べる職。頼朝はこの職に任ぜられた。

【總追捕使】(ツウツキブシ)とは一國若しくは數國を守護する職。源頼朝は奏請して國毎にこの職を置き、その家人をこれに補任した。後に守護と改稱した。

東鑑卷六、文治二年三月一日の條に「諸國被補總追捕使並地頭。」

長門國守護次第に「土肥次郎號總追捕使。」

【奥都城】オクツキ。はか。墓所。

萬葉集、卷十八に「大伴の遠つかむ親のおくつきはしるくしめ立て人の知るべく」  
原文には「これが天下の總追捕使のなれのはてにぞありける」とあるのを本文のやうに改めた。

【鎌倉の宮】官幣中社鎌倉宮。鎌倉町二階堂に鎮座。祭神は護良親王。明治二年創建。社殿の背後にある土窟は親王が建武元年(一九九四)十一月から翌二年七月まで幽閉されたまうた所だと言ひ傳へてゐる。



例祭は八月二十日。

護良親王は後醍醐天皇の皇子。はじめ出家して尊雲法親と號し、比叡山の塔に住ませ給うたから、大塔宮と申し奉つた。夙に天皇の討幕の御計に與り、僧徒を誘つて天皇を援けさせ給うたが、事敗れて楠木正成の赤坂城に入らせられた。赤坂が陥るに及んで、大和の十津川に隠れ給うた。やがて著髪して名を護良と改め給ひ、令旨を諸國に下して勤王の兵を募



らせられ、尋いで吉野に兵を擧げて北條氏の軍と戦を交へさせ給うた。降つて建武中興の際征夷大將軍に任ぜられ給うたが、不幸にも足利尊氏の讒に逢はせられて鎌倉二階堂の土窟に幽せられ給ひ、尋いで建武二年(一九九五)中先代の亂に、足利直義の臣淵邊義博に弑せられ給うた。御年二十八。

【ひさまづく】「跪」の字をあてる。膝がしらを下につけて屈まること。臀をあげ、兩膝を座について屈まること。

宇津保物語、忠乞に「たゞ君のおり給ふところに、五位・六位ひさまづきかしこまり」

【ふたがりて】「ふさがりて」に同じ。

源氏物語、桐壺の卷に「御胸のみつとふたがりて」

【はふり落つる涙】はら／＼とこぼれ落ちる涙。

「はふる」は「あふる」(溢)に同じ。みちこぼれること。

萬葉集、卷十一に「葦鴨のすだく池水はふるともまけ溝のへにわれ越えめやも」

【拂ひもあへず】拂つても、拂つても、拂ひきれない。

「あへず」は「敢へず」の意。しおほせぬ、成しとげ得ぬ、え堪へぬ、などの意。

萬葉集、卷十五に「秋さればおく露霜にあへずして都の山は色

づきぬらむ」

【梅が香にむせてこぼるゝ云々】「社頭にかをる梅の香にむせてはら／＼とこぼれる我が涙であるかな。」といふほどの意。鎌倉宮の神前にひさまづいて、無量の感慨に、おぼえずこぼれる涙を、梅の香にむせてこぼれるものとして、よみ出でたのである。

9 挿圖

由比が濱 釋義「由比が濱」参照。

鎌倉大佛 釋義「大佛」参照。

源頼朝の墓 釋義「源頼朝の墓」参照。

二三 眞劍勝負

1 解題

蘆田惠之助の書いた文章をもとにして、編者に於て適宜筆を加へて、本課を成したものである。原作を改更した部分が大部分なので、特に原作者の諒解を得、且つ原作者を尊重する意味に於て作者名を明記しなかつた。

原作者蘆田惠之助は、明治六年一月、京都府に生れた。兵庫縣に於て高等小學校を卒へて後上京し、國學院大學專科一年を修業。東京高等師範學校訓導・朝鮮總督府編輯官をつとめた。今は自由人として國語教室行脚を志し、全國を巡つて國語教育の實地指導と教授法の實際的研究とを行つてゐる。讀み方教授に關する多くの著書があり、尙、國語教授に關する雑誌「同志同行」を發行してゐる。

2 編纂の用意

興味の中に教訓を含めた物語である。故に學習上には生

徒の興味を喚起して樂な教授を進めつゝ、しかも讀後に或感銘を残すことの出来る教材である。「道は一つだ」一 道に至れるものは他の道においてもまた奥義を極めてゐるといふことを十分に味讀させたい。

3 要旨

茶道にかけては一かどの達人である茶坊主が、武士の姿になつてゐたのを見透かされて、浪人の一武士に眞劍勝負を申込み困り果てる。しかし、遂に意を決して、せめて死ぬ時の醜態を残すまいと、或劍道師範に、死方について教を乞ふ。そこで師範は、武士姿の坊主に茶を立てさせた處、彼は死の目前にあることをも打忘れたやうに、實に見事に茶を立てた。その一舉一動に感じ入つた師範は彼が既に茶道によつて劍道の奥義を極めてゐることを告げ、さて一通りの作法を教へ、その浪人に立合



せる。教へられた通りに立會つた坊主は、果してその浪人をして平あやまりに詫びさせるに至る。一篇の眼目は、茶道の極意も劍道のそれと相通するものだといふのであるが、又、茶坊主ながら武士としての名を惜しんで、健氣にも死を覺悟し、一つはその爲に相手を壓し得た事、更に、必要もないのに、妄りに人の生命を脅かすが如き虚勢を示すべきでないといふことなども、本課によつて考へさせたい。

#### 4 概説

第一節（一三八頁—一四〇頁五行） 主人の江戸勤番の爲に、武士に變装してお伴した茶坊主は、江戸着後も、身をへりくだつて外出をも憚つてゐる。

第二節（一四〇頁六行—一四二頁一〇行） 或日用事あつての外出先で、一浪人から眞劍勝負を申込みれて困り果てる。浪人は固よりからかふ氣であつた。

第三節（一四二頁末行—一五〇頁五行） 一命を捨てるより外ないと決心した茶坊主は、劍道師範を訪うて、醜くない死方を質す。師範は茶を立てさせてその伎倆に

感じ、その極意は劍道でも一つだと言つて、それから死方を授ける。茶坊主は、師範の親切を謝して引返す。第四節（一五〇頁六行—一五五頁） 茶坊主は、教のまゝに待詫びてゐる例の浪人とわたり合つて、遂に彼を憎伏せしめ、主人の屋敷に引上げる。

#### 5 取扱上の注意

【辭句の問題は殆どあるまい。あつても最初の全文通讀には問題にしないがよからう。かくて全體の話の進展を一わたり承知させた後に、辭句の註釋、それから内容上の重點に關する吟味を試みさすべきであらう。

【「茶道にかけては一かどの達人」といふ一句を、先づ注意させておく必要がある。江戸勤番といふことも、歴史と關連して、單なる辭句の説明以上に、生徒の認識を確かにしてかゝりたい。さうでないと、「お國者」などの意義がよくわかるまい。

【お茶坊主の純眞な人物である點については、外出を遠慮してゐる事實、浪人のからかひを眞に受けるところなどにも現れてゐる。茶道の達人であることと、右のやうな

性格とについては、生徒をして等閑視せしめてはならぬ。

【「死方を學ばうといふ者は、そのもとが始めてぢや。」といふことは、この課に於ける意味としては、さして問題にならぬが、考へやうによつては、人間はすべて、死方を學ばなければならぬのである。さういふ意味合から、このお茶坊主と、劍道師範との問答は、出来るだけ慎重に扱はれることが望ましい。

【師範が茶を立てる坊主の手前を見つめてゐる點は、いかにも師範らしい目のつけどころである。それから、師範の言ひ聽かせる内容は、一言一句も忽せにしないで、味はひつゝ讀むことが大切である。

【以上は留意すべき點の二三の例である。この外にも内容上玩味すべきところが多からう。

#### 6 設問

- 1 このお茶坊主は、大體どういふ性格の人間と思はれるか。
- 2 「死後の名を惜しみたう存じまする。」といふ語に對

しては、どう感ずるか。

3 茶道と劍道と、「道は一つだ」といふのは、どういふ意味であらう。

4 お茶坊主が師範の教へる通りに實行することが出来たのはなぜであらうか。（一には茶道に於て體得してゐるところがある故である。二には死生を超越した心境にある故である。）

5 浪人が負けとなつたのは、何故であらうか。

6 次の語の意を問ふ。

- イ 大小を帶する。
- ロ お國者。
- ハ 一手御指南に預りたうござる。
- ニ 未來、永劫、生々世々、等。

#### 7 釋義

【眞劍勝負】 シンケンショウブ。（一）まことの劍を以て果しあふこと。（二）眞面目にする勝負。こゝでは（一）の意。

【大名】 ダイミヤウ。江戸幕府時代に、領地・知行の持高一萬石以上のものを總稱した。外様・譜代の別なく、そ



の土地・人民を私有して、一地方の君たるものをいふ。「大名」とは、もと鎌倉時代に、將軍の家臣である守護・地頭などに與へた號である。

【抱へる】カ、へる。家臣又は奴婢などを雇ひ入れること。

狂言、俄道心に「料理人と出家をかへうと存する。」

【お茶坊主】おチャパウズ。武家時代に、幕府又は諸侯の邸内に、茶の湯並に給仕などの雑役を勤仕した剃髪のものといふ。

幕府では同朋頭に屬し、奥坊主・表坊主等に分つた。

【茶道】チャダウ。或はサダウ。茶の湯の道。

「茶の湯」は、客を招いて茶をすゝめる會。これに炭手前・濃茶手前・薄茶手前がある。(手前とは點茶・炭置の所作の稱で、これに三種ある。點前ともいふ。爐又は風呂に炭を入れる手前を炭手前といひ、濃茶を點てる手前を濃茶手前、薄茶を點てる手前を薄茶手前といふ。)

まづ客が着座して炭手前を行ひ、香合を客に示す。次に懷石料理を供し、客に中立を乞ひ、床の掛物を花に改め、

濃茶手前を行ふ。茶入・同袋・茶杓を客に示す。次に薄茶手前を行ふ。炭手前・濃茶手前は亭主がこれを行ひ、薄茶手前は代點をなすことがある。

村田珠光を茶湯の祖とする。足利義政の時その體系が備はり、武野紹鷗から千利休に至つて大成した。織田信長・豊臣秀吉等、與つて力があつた。利休の孫宗旦に至つて千家の茶道が興り、その次子宗左は表千家、その三子宗室は裏千家を創めた。この二流は今なほ盛である。大名で流祖になつたのは、遠州(小堀遠江守政一)・石州(片桐石見守貞昌)・三齋(細川忠興)・鎮信(松浦肥前侯)・不味(松平出雲侯)である。

もと禪僧の茶儀に基き、床に墨蹟を掛け、靜坐・喫茶の三昧に入り、和敬清寂を味はふのを第一義とした。小堀遠州は頗る鑑識に富み、名物茶器を選出し、時代の風潮につれて稍華美となつた。後世高價な茶器、珍味の懷石、複雑の作法、贅澤の茶室・築庭等が行はれ、富豪はこれを遊戯化して茶道の本義を失つたが、これがために文化的藝術的茶道の發達を見た。幕末及び明治の代には頗る

衰頹したが、大正時代世界大戰後の好景氣に際し、舊諸侯の名物茶器が續々世に出でたので、富豪は争うてこれを求めた。かくて茶道の本義は益々忘れられたが、文化的藝術的の茶道は再び勃興した。

【一かどの】ヒトかどの。なみすぐれた。一きは目だつこと。一つきはだつこと。

【殿様】トノサマ。(一)主君又は貴人の敬稱。(二)特に大名を家來が呼ぶ稱。こゝは(二)の意。

【在國】ザイコク。江戸時代の諸侯は幕府に對して參勤交代を行つた。即ち一年は自己の領國にあり、一年は江戸に詰めて幕府に出仕した。故に江戸には各藩の屋敷があり、大名は妻子をこゝにとめておく習であつた。その自己の領國にある時を在國といふ。

【心ゆくばかり】満足するまで。氣が晴々とするまで。

【江戸勤番】エドキンバン。「江戸詰」ともいふ。江戸時代に諸侯が參勤交代して江戸に出仕してゐる時をいふ。又交代することなく常に江戸に居るのを「江戸定詰」又は「定府」といつた。

【生來の】セイライの。うまれながらの。もと／＼の。元來の。

【士分】シブン。武士の身分。武士の分際。

【太刀打】タチウチ。太刀をもつて闘ふこと。

伯耆卷に「矢車は長々し、打出で、太刀うちして勝負を決せん。」

長祿記に「筒井の若黨にも、上の庄次郎・山本二郎五郎討死にす。これは辰の剋ばかり。一番の太刀打なり。」

【大小】ダイセウ。武士が腰に差した大小の刀、即ち刀と脇差。

【物見】モノミ。見物すること。

【遊山】ユサン。(一)山に遊ぶこと。(二)轉じて、戶外に遊ぶこと。こゝは(二)の意。

【氣の毒】キのドク。こゝでは、不便に思ふこと。あはれに思ふこと。

「氣の毒」は、心の害毒、心の煩悶の義で、自分の心にもいひ、他人の身の上にもいふが、これは「いたつく」いたはる「いとほし」に内外二つの義があるのと同じであ



る。

(一)心苦しいこと。心に安んじないこと。氣にかゝること。心配。

(二)他人の身の上を不便に思ふこと。

思ふに「氣の毒」といふ感は、こちらが先方の不便な様子を見たり聞いたりした場合に、それに對してこちらの氣の毒になるといふ意であると思はれる。

【よんどころない】「よんどころない」の音便。やむを得ない。餘儀ない。

【威儀】キギ。容儀(みえ)のいかめしいこと。

【影】カゲ。こゝでは、姿の意。

「影」には、左の諸の意がある。

(一)物が光を遮つて、己の形が黒く物に映はれるもの。

(二)物の形がそのままに鏡や水などに映つて見えるもの。

(三)姿。

(四)おもかけ。おもさし。顔つき。

「陰」は、(一)目面に物が立つてその裏の暗い處。ひかけ。

(二)人目にあらはれぬ處。

【山下】ヤマシタ。江戸の上野の岡の西麓をいふ。

【不忍池】シノバズノイケ。今の東京市下谷區上野公園内にある池。上野臺と本郷臺との間の低地に在つて周圍約二軒。池中の小島には辨天堂がある。もと池中一面蓮を植ゑてあつたが、近時一部を浚渫して船遊場を設けた。

池畔には多く樹木を植ゑて風趣を添へ、北畔には博覽會場などに利用される常設の建築物がある。

【鐘一ツ賣れぬ日はなし江戸の春】其角の句で江戸の繁昌を吟じたもの。

釣鐘などといふものは一つ拵へておけば數百年・千年ももてるので、さう容易に入用なものではないが、流石將軍のお膝元の大江戸では、毎日釣鐘の一つづつも賣れぬ日はないと、江戸の繁昌を大袈裟に誇張したものである。

【さる俳人】或俳人。こゝは榎本其角をさす。其角、本姓は竹下、後に母方の姓榎本を冒した。初め醫を草薙三越に學んだ。詩は大巖和尚を師とし、書は玄龍に學び、畫は一蝶を師とした。延寶の初め蕉門に入つて俳諧を學び、蕉門十哲の首となつた。芭蕉の歿後江戸座を開き、洒落

の俳風を唱へて天下を風靡した。寶永四年(二三六七)歿。年四十七。

【お國者】おクニモノ。田舎者。始終本國に勤めてゐる者の義である。

【しどろに】次第なくうちみだれた状にいふ語。これを更に甚だしくいふときは「しどろもどろ」といふ。

【辨天様】ベンテンサマ。不忍池の中の小島にある小祠で、辨財天を祀る。

辨財天は、歌謡・音樂の事を掌る女神。無礙の辯財があり、佛法を流布し、壽命増益・怨敵退散の利益を施すといひ、又、財寶満足の利益を施すともいふ。よつて「辯才」とも「辨財」とも書く。

梵語の Varuṇa. 形像は頭に白蛇を飾つた寶冠を戴き、右手に劍を把り、左手に寶珠を捧げてゐる。人臂で青色の蠶衣を着け、弓・箭・長稍刀・杵等を持ち、常に一足をそばだててゐる。二臂で左の膝を立てて琵琶を弾するものもある。我が國では池水の邊に祀り、白蛇をその使者として七福神の一に加へる。これを池邊に祀るのは蓋し妙

音と能辯とを流水の音樂になぞらへ、琵琶をその音樂の象徴としたのである。我が國では古來市杵島姫命と混

じ、多く島に祀られる。近江の竹生島・相模の江ノ島・安藝の宮島・大和の天の川・奥州の金華山の辨天堂は日本

五辨天といふ。

【一辯ある】ヒトクセある。どこかなみ／＼でないところのあること。多くはよくない方にいひ、どこか普通の人とちがつてゐる場合にいふ。

【浪人體】ラウニンテイ。浪人の風體。浪人すがた。

「浪人」とは、官職・祿などに離れて流浪してゐる人をいふ。浪士ともいふ。

「體」は、(一)かたち、ありさま。すがた、やうす。(二)風體の略。轉じてその種類の者ども。卑下していふ語。

狂言、粟田口に「私等ていまでが、うれしうござりまする。」

【件の武士】クダンのブシ。前の武士。

「件」は「クダリ」の音便。前にあげたことをさしていふ。【づかくと】「つかく」とを更に強めていふ語。遠慮なしに、こばやく進んだり退いたりするさま。



【あいや、暫く】「あいや」は「あゝ」と「いや」との結合。一種の發語である。

「暫く」は「暫くお待ちなさい」の意。

【近頃】チカゴロ。「この頃になし」の義であらうか。はなはだ。大層。

謡曲、鞍馬天狗に「これは近頃狼藉なるものにて候。」

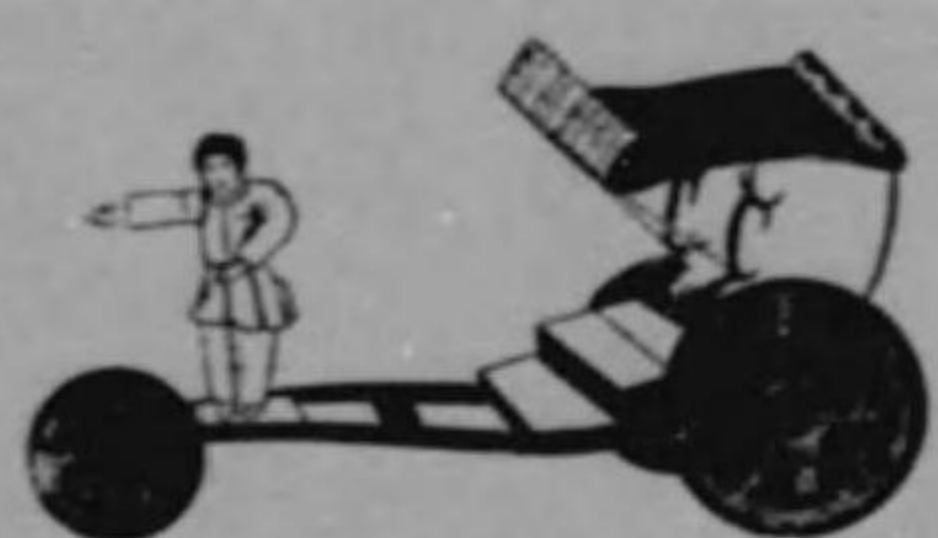
謡曲、鉢木に「近頃よき火にあたりて寒さを忘れて候。」

【遍歴】ヘンレキ。廣く各地を歴めぐる。遊歴・周歴。

【土州】トシウ。土佐の國。

【御家中】ゴカチウ。御家來。「家中」は大名・小名の家來をいふ。

【指南】シナン。「指南車」から轉じて成つた語で、教へ導くこと。指導。教授。



「指南車」は支那の周公の時始めて作つたといふ一種の車。上に人形があつて、車は廻轉しても人形の手は常に南を指すやうにしかけたものである。一説には磁針を車上に装置するともいふ。遠

行しても路にまよはないために案出したものである。

【とかく】(一)あれこれ。あちこち。(二)ともすれば。往々。

こゝは(一)の意で「とかくの返事」は、あれこれと筋道の立つた返事の意。

【得たりと】しめたとばかり。自分の思ふつぽにあつて得意になるさま。

【言葉を卑うし】へりくだつて丁寧な言葉遣をすること。

【卑うし】は「ヒクうし」とよむ。「イヤシうし」とよまぬやう注意。

【たつての】ぜひともの。強ひての。

【お聴濟】おキ、ズミ。お聞入れ。お聴届け。御承諾。

【精進】シャウジン。もと佛經の語。(一)意を専らにして佛道を修め勤めること。(二)轉じて、専心物事にあたること。

(三)身を淨め、ものいみすること。(四)野菜を用ひて、肉食しないこと。

こゝは(二)の意。

【酒手】サカテ。酒を買ふ代金。酒代。又、車夫・雇人などに貨錢以外に増し與へる金錢。

【絶體絶命】ゼツタイゼツメイ。體も命も絶え極まる義で、

逃れるに道のない危急の場合にいふ語。

【我にかへる】今まで思慮分別もなく呆然としてゐたものが、落着いて正氣になること。

【未練】ミレン。思ひきりのわるいこと。心の残ること。

【はしくれ】(一)かたはし。すゑ。(二)轉じて、末輩。下にくもの。こゝでは(二)の意。

【腰の大小の手前】「手前」とは、こゝでは、人の見る前、他の者の見る目の前の意。

腰にさした大小の見る前、即ち腰の大小に對して、又は腰に大小を差したことに對してなどいふ程の意。

【最期】サイゴ。死にぎは。命を果てる期。今はの時。臨終。

【面目】メンボク。メンモク。(一)かほかたち。(二)世の人に合はせる面。人の世に立つて譽れをたもつこと。こゝは(二)の意。

【師範】シハン。學問・技藝などを教へる人。師匠。

【御邊】ゴヘン。同輩に對して用ひる對稱の代名詞。そな

た。貴殿。そこもと。

【所望】シヨマウ。のぞみ。希望。

【さりながら】「しかありながら」の約略。さうではあるが。しかしながら。

【立合】タチアヒ。雙方互に勝負を競ひ、又は格闘すること。

水鏡、上に「その國のつはものなるべし、われたちあふべからずと思ひて」

【一時】ヒトトキ。昔の時の單位。今の約二時間ほどの時間。

【色にも出さず】顔色にも見せず。

【承引】シウイン。承け引くこと。承諾すること。

【千萬】センバン。度合の深いことにいふ語。まことに甚だ。

【挨拶】アイサツ。うけこたへ。返辭。應對。答禮。西行談抄に「されば人によく告げさんと、あいさつに、人もえ告げず、程ふれば興なし。」

【赤心】セキシン。少しもいつはりのない心。まごころ。



丹心。

【率直】 ソツチック。正直一方なこと。かざりけがなくて、すなほなこと。

【その許】 そのモト。同等のもの又は目下のものに對する對稱の代名詞。そなた。おまへ。

【殊勝】 シュショウ。佛經の語で、殊に勝れた徳。(一)けなげなこと。神妙。奇特。こゝでは(二)の意。

【目がね】 物の善悪可否を見定めること。めき。みわけ。

【言はせも果てず】 言ひ終らせもせぬうちに。

【膝を打つ】 今まで合點のいかなかつたことがはつきりとうなづかれた場合などにする動作。

【一服】 イップク。煙草・茶・藥などを一回服用すること。又その量。

狂言、薩摩守に「一服。一錢でおりのはいの。」  
五十年忌歌念佛に「煙草一服。所望したし」

【まじろぎもせず】 まばたきもせず。またゝきもせず。  
【捌く】 サバク。順序よく物事を處理していくこと。

【道に至れる者】 その道の至極の境地まで達した者。その道に十分に通曉した人。

【ほと／＼】 ほとんど。まつたく。

【奥義】 オクギ。アウギ。最も奥深い肝要な意義。奥秘・秘訣。

【落着き拂ふ】 十分に言語動作をおちつけること。沈着になること。

【本だたみ】 「袖だたみ」などといふ略したたみ方にしないで、正しい型通りにたむこと。

【股立】 モ、ダチ。袴の左右の、股の側面に當つて明きのある、その縫止めの處。

「袴の股立をとる」とは、股立をつまみあげて、帯又は袴の紐にはさむこと。

【作法のとほり】 きまつた仕方のとほり。型の通り。

【上段】 ジャウダン。劍術などの構へ方の一。両手を高くあげ、武器を頭上にふりかざして身構へすること。

【氣合】 キアヒ。劍道・柔道・相撲などの技を競ふ場合に、精神の全身に活躍して敵に迫る氣勢。又はその掛聲。

【超越】 テウエツ。物事にこえすぐれること。ぬけ出ること。

「死生を超越する」とは、生死といふやうなことは、はるかにとほりこして、全く心におかないこと。

【親身】 シンミ。極めて近い親族。

【未來永劫】 ミライエイゴフ。これから後いつ／＼までも限りなく永い間。

「永劫」は、極めて永い年月。「劫」は佛敎の語。人の定命八萬歳であつた時から、百年毎に一歳を減じて竟に十

歳に至り、後百年を経て一歳を増し、八萬歳に達する間の年數を一小劫といふ。一小劫の二十倍を一中劫とする。

又、世界の成立から破壊までを成・住・壞・空の四劫に分ち、これを通じて一大劫といふ。

又、方四十里ある大石を、百年毎に一度、羅殿の衣を以て拂ひ、之を磨滅し盡くしても、まだその年數を盡くさないといふ極めて永い年數。「刹那」に對する語。

【生々世々】 シャウジャウセ。現世も後世も。永世。永劫。

【池の端】 イケのハタ。

【待詫びる】 マチワびる。待ちくたびれる。待ちあきる。

【必定】 ヒツチャウ。きつと。必ず。

【腰拔奴】 コシヌケメ。いくちなしめ。無氣力者め。

「腰拔」は、臆病で氣概のない人を罵る語。

【三十六計】 サンジフロクケイ。「三十六計逃ぐるに如かず」の略。逃ぐべき時に逃げるのは兵法の上策であるとの意。轉じて、面倒なことは避けるにこしたことはないとの意に用ひる。

南史、王敬則傳に「敬則曰、檀公三十六策、走为上計。」  
冷齋夜話に「淵才曰、三十六計走爲三上計。」

【一の手】 イチのテ。最上の方法。第一の手續。

【咳く】 ツブヤク。ぶつ／＼とひとりごとをいふこと。くどくどといふこと。

源氏物語、葵の巻に「そば／＼しからでおはせよかしとつぶやかれ給ふ。」  
【案に相違する】 思つてゐたこととは違ふこと。考へてゐたことがはづれること。思ひの外。案外。



【怖氣】 オチケ。怖ちる心。おそれ。ひるみ。

【手に入る】 熟達の域に達してゐること。

【乗すべき】 つけ込むことの出来る。

【氣を吞まれる】 元氣をうばはれること。心のはたらきを先方にとられて、思ふやうにならぬこと。

【窮してしまふ】 どうにもならなくなつてしまふこと。こまりきること。つまること。

【物見高い】 モノミダカい。何事をもものめづらしがつて見物しがちなこと。争つて見物すること。

「物見猛い」ともいふ。

【鶉の毛】 ウのケ。物の極めて微小なのに譬へていふ語。

室町千疊敷に「身中に、うのけの突き創も斬り疵ともあら不便や。」

【なめてゐる】 眼中においてゐない。のんできゝる。物の数とも思つてゐない。

【天邊】 テッペン。いたゞき・頂上・極點などの意であるが、こゝでは、てんで、あたまから、まるつきり、などといふほどの意に用ひられてある。

【段が違ふ】 うでまへがはるかにちがふこと。格段の差があること。

【胴ふるひ】 全身がふるひをのゝくこと。

【太刀筋】 タチスヂ。太刀のつかひかた。

【破目】 ハメ。ばあひ。をり。境遇。

【からり】 堅い物が、他の物に觸れ、または轉がつて出す音。こゝは、太刀を地上に投げ出した時に發した音の形容である。

【おろく聲】 うるみしぶつた泣聲。

【手の中】 テノウチ。うでまへ。わざまへ。技倆。

國姓爺合戦に「足取る手の中四尺入寸、身の開き」

【刀を引くとあれば……】 刀を引いてをさめるといふことであるなら、何も勝負をきめることはいらないとの意。

【そこく】 とり急ぐさまにいふ語。いそく。倉卒。

【話題】 ワダイ。話の題目。話頭。話の種。

【真相】 シンサウ。物事の正體。物事の實際の様子。眞實の事相。

洛陽伽藍記に「菩提達磨曰、得其真相也。」

8 挿圖

眞劍勝負

本文によつて特に描いたもの。筆者は洋畫家渡部審也である。



## 二四 山田長政 (原漢文)

齋 藤 拙 堂

### 1 解 題

徳川初代の快傑山田長政が暹羅に渡航し、殊功を異域に建てて諸侯王に封ぜられ、大いに日本男兒の意氣を示した事蹟を敘した齋藤拙堂の原漢文を書き下し文として掲げたものである。

### 2 作 者

齋藤拙堂 サイトウ セツダウ。

伊勢津藩の儒者。名は正謙。字は有終。通稱は徳藏。拙堂はその號。晩年には拙翁とも號した。幼にして穎悟、長じて昌平齋に學び、古賀樸に就いて力を古文に用ひ、卓然として一家を成した。文政三年(二四八〇)二十四歳のとき藩發有造館に擢んでられ、尋いでその講官となつた。藤堂高猷の封を嗣ぐに及び、上士に進み、侍講を兼ね、この左右に啓沃すること十餘年、祿二百石に至つた。爾來江戸に扈從し、名士と交り、聲名が愈々顯れた。天保十二年(二五〇一)郡宰に進み、銳意治績を擧げた。程なく藩發の督學に進み、文武の學政に參與した。俊秀を選んで洋學・兵法・砲術を學ばしめ、更に又率先して種痘館を開く等、經世の才の見るべきものが少くない。又田賦・法律の事を究め、本朝の典故に通曉し、博識

### 3 編纂の用意

の譽が高かつた。安政二年(二五一五)六月特に將軍家定に謁見を命ぜられた。幕府は擢んで儒官に任ぜんとしたが、辭して就かず、一意藩學に盡くし、遂に祿三百石に進み、龍脊が殊に深かつた。同六年致仕した。最も文筆に長じ、その「月潮遊記」「陪遊笠置山記」等は、後世紀事文の範と推獎せられてゐる。慶應元年(二五二五)七月十五日、茶磨山莊に卒した。年六十九。大正三年十一月、正五位を追贈せられた。

謂はゆる千九百三十五六年の非常時は今や目睫の間に迫つた。九千萬國民は、異常の決心と覺悟とを以て天壤無窮の我が君國を泰山の安きに置かんことを期してゐる。日本精神の高揚今日より盛なるはない。この時に於て、近世の快傑山田長政の海外雄飛の事蹟を課するのは必ずしも無意味な事では無からうと思ふ。長政が經商の眼をくらし、商船の中にかくれて臺灣に渡航し、更に蠻船に附乘して暹羅に赴いたところ、暹羅軍を授けて強敵六



昆を破り、功によつて六昆王に封ぜられ、日本男兒の爲に萬丈の氣を吐いたところ、臺灣渡航の當時の恩人どもを六昆に迎へ、款待の限りをつくしてその舊恩に報いたところ、戦に臨む毎に駿府なる淺間の神に禱をさへげたところ、志を遂げた後、報賽の爲、當時の戦艦の狀を摸繪して扁額とし、商舶に附して淺間廟に奉獻したところなど、さすがは日本男兒であるとうなづかせる節が多い。若しそれ文の妙に至つては、既に定評がなる。よろしく再讀三讀せしめて、雄健にして遒麗なる筆致を味ははしめ、併せて近世の日本が生んだこの快傑の氣魄と快學とに讚美感歎の情を寄せしむべきである。

#### 4 要旨

山田長政の海外雄飛の顛末を知らしめ、これによつて日本民族の發展性を顧み、今日のわが國の世界的位置を考へ、殊に東亞に於ける我が國として、この愉快なる歴史の力を思はしめたい。形式としては、例によつて、原漢文としての文勢、口調に親しましめるやうに努むべきである。

#### 5 概説

第一節（一五五頁——一五六頁一〇行） 山田長政が、國內に仕官するを屑しとせず、西の方暹羅に遊んだ、その次第。  
第二節（一五六頁末行——一五九頁六行） 暹羅の國難を救ひ、國主の寵を受けた、その顛末。  
第三節（一五九頁七行——一六二頁） 長政の、アンブラとしての名が、彼の國の内外に高くなつた時、最初自分を便乗させて来た二人の商人を引見して、當時の恩誼を謝したこと、及び故國を慕うて淺間社に扁額を奉つた事を敘して、話を結んだ。

#### 6 取扱上の注意

先づ素讀させる際に、用字の普通でないものに留意させたい。尤も、それらには振假名があるが、これが原漢文たる故に然ることを思はしむべきである。  
素讀の後には、一節づつ、註釋する必要があらう。それも、あまり、一字々々の訓詁に陥らず、一通りの字義を

説いた後は、主として熟語としての意義、特にその場處

場處に應じての譯し方を重んじて説いたら、どんなものであらうか。そして、漢文の調子即ち漢文での物の言ひ方を、國語と比較して呑み込ませることを努めたい。それには、又、昔時のやうに、朗讀を繰返すのが一法である。

【内容上】 即ち山田長政の傳記としては、國史と關聯せしめて、大體、彼の史的の位置を明らかにすることが、最初に必要な仕事であらう。

#### 7 設問

- 1 次の語句の意義を説明せよ。
- イ 下海禁なし。
- ロ 迎勞の使沓至す。
- ハ 戦艦の狀を摸繪せしめて扁と爲す。
- ニ 意はざりき、大王能く自ら青雲の上に致さんとは。

- 2 次の語を訓み且解釋せよ。
- 經商。回易。亡慮萬餘人。挑戰。桑梓。報賽。便服。

叩頭。

#### 8 釋義

【山田長政は云々】 原文には、この前に若干の文字がある。「参考」の原文参照。

【駿府】 スンプ。今の静岡縣静岡市の舊稱。安倍川三角洲の頂點と半島狀の賤機（シヅハタ）連丘の尖端とに位置する。王朝時代駿河の國府をここに置いたので、府中又駿府と稱した。戰國時代、今川氏はこの地を本據として威を振つたが、その亡ぶるや、徳川氏に併せられた。家康は濱松から移つて居城をここに構へ、一旦江戸に轉じ、後またここに退隱した。その頃から諸國の商人が次第に城下に集まり、市況が繁盛に向つた。静岡と改稱せられたのは明治二年（二五二九）のことである。

【市人】 シジン。まちの人。まちに住む人。町人。

史記の信陵君傳に「市人皆觀公子執轡、從騎皆竊罵侯生。」

【兵事】 ヘイジ。軍事上に關する事柄。戦争に關する事。

周禮の司服に「凡兵事、韋弁服。」

國姓爺合戦、唐船の條に「兵事軍術を嗜み」



【慶元の際】 ケイゲンのサイ。慶長・元和年間。

「慶長」(ケイチャウ) は後陽成・後水尾兩天皇の御代の年號(二二五二—二二七四)、元和(ゲンワ・ゲンナ) は後水尾天皇の御代の年號。(二二七五—二二八三)

【侯伯に干(モト)む】 諸大名をおとづれて出仕を干め願ふこと。

「侯伯」(コウハク) は、諸大名。諸侯。

書經の周官に「内有三百揆四岳、外有九州牧侯伯。」

【肩(イサギヨ)しとせず】 きもちよくおもはぬこと。こゝは、大名に頭を下げて仕を求め、これを不快におもふこと。

【下海禁なし】 海外へ赴くことについての禁制がなかつた。海外への渡航は自由であつた。

【府】 フ。駿府。前の「駿府」参照。

【經商】 ケイシャウ。旅商。旅商人。

【臺灣】 タイワン。日本列島の最南端に住し、支那福建省の東方に横たはる臺灣本島・澎湖島及び附近島嶼の總稱。九州より稍、狭くて、帝國總面積の約六分の一。臺灣本

島は南北約四〇〇軒、東西の最も広いところ約二五〇軒。島の東方に偏して中央分水嶺が走り、これに伴なふ支脈を分派する。全島の三分の二は山地で、平地はわずかに三分の一に過ぎない。しかも大部分は西部で占めてゐる。山地には高峻な峯が多く、三、〇三〇米(二萬尺)以上のものが四十八座を數へる。就中新高山(三、九五〇米)・次高山(三、九三一米)・秀姑巒山(三、八三三米)・マボラス山(三、八〇六米)・南湖大山(三、七九七米)の五山は富士山よりも高い。平地は熱帯圏・亞熱帯圏にあつて、冬も霜を見ることは殆どないが、夏は風があつて案外凌ぎ易い。山地に入れば温帯・寒帯があり、中央分水嶺は冬期中雪を戴いてゐる。峻嶺が聳え立つてゐるので、水系が四方に射出して、大河の餘地なく、僅に西方斜間に稍、長流を見るのみである。氣温が高く日射が強いために農作物はよく繁茂し、米・砂糖・茶の産出が多い。アルコール・バナナ・石炭の産も、亦年と共に増大してゐる。それ故、臺灣は軍事上は勿論、産業上からいつても、一大寶庫である。都會は、我が領有以前には城壁

を繞らすものが多かつたが、漸次撤去せられた。中にも

臺北・臺南・臺中・基隆・高雄の五市の如きは、文明的施設によつて大いにその面目を新にするに至つた。臺北市に

總督府を置き、臺灣總督をして立法・行政・司法を統べしめ、その下に五州(臺北・新竹・臺中・臺南・高雄〔知事〕・

三廳(澎湖・臺東・花蓮港〔廳長〕)を置き、更にその下に、市〔市尹〕・郡〔郡守〕・街〔長〕・社〔長〕を置く。臺灣軍司令

部は臺北市にあつて、軍隊を統率し、守備隊は臺北と臺南とにあつて、全島の守備に當る。その他、基隆附近、

澎湖島には要塞があり、屏東には陸軍飛行第八聯隊がある。又澎湖島の馬公は海軍要港である。面積三五、九七

四方軒。人口四八五萬八千。内、内地人二四萬四千。外國人四萬五千。

【回易】 クワイエキ。各地を巡回して交易すること。あちこちあるきまはつて商賣すること。

【舟を大阪に艤す】 大阪で船支度をしてゐた。

「艤」とは、船をよそほふこと。出船の準備をすること。史記の項羽本紀に「烏江亭長、艤船而待。」

【附乗】 フジウ。他人のあとについて、船に乗りこむこと。こゝは經商瀧・大田のともをして、貿易船に乗りこむことにいふ。

【船間】 サウカン。船の中央の室。中倉。胴(ドウ)の間。

【前請を申ぬ】 ゼンセイをカサぬ。貿易船附乗のことをかさねてたのみ入れた。

【鑿船】 バンパク。蕃船とも書く。えびすの船。外國の船。

【暹羅】 シヤム。Siam アジャ洲の一獨立國。印度支那半島の中部を占め、佛領印度支那と英領ビルマとの間に狭まり、南はシヤム灣に臨み、その一部はマライ半島の中央に延びてゐる。北部は山嶽が多いが、中部メナン河流域の平野は地味が肥沃で、多量の米を産し、大麻・甘蔗・綿・煙草・果實・護謨・椰子等の栽培が盛に行はれる。山地には森林が多く、白檀・チーク材等を産する。鑛産は金・錫・紅玉等。就中錫は特に多い。象と水牛とは農耕・運搬に使用される。輸出品中、米はその首位を占め、錫・チーク材等がこれに次ぐ。國人は一般に氣概に乏しく、商權は概ね支那人の掌中に歸してゐる。首府はバンコッ



ク。面積五一八、六〇六方杆。人口一、一五〇萬六千。

【邦内】 ハウナイ。暹羅の國內。

【騷亂】 サウラン。又、喪亂とも書く。事變が起つて世の中のさわぎみだれること。騷動。擾亂。騷擾。  
詩經の小雅に「喪亂既平、既安且寧。」

【四鄰】 シリン。四方の鄰國。「鄰」は「隣」とも書く。「隣」は俗字。但し、今は普通に行はれてゐる。

書經、蔡仲之命に「陸渚乃四鄰、以蕃王室。」

【交侵す】 コモく、ヲカす。かはるく、攻めよせて來た。

【六昆】 リゴール。Lion。今のマレー半島の中部の地。マレー半島(Malay Peninsula)はアジアの南東部に突出する半島。扇の骨のやうに南に延びた印度支那山脈の一派が長く延びて脊梁をなし、マラッカ海峡を隔ててスマトラ島に對し、東に南支那海、西に印度洋を分つ。地勢は山がちで、降雨が多く、護謨・珈琲・綿・煙草及び錫・鐵等の産に富む。今、シヤムの一部・英領ビルマの一部・馬來聯合州・海峡植民地等に分れてゐる。

【師】 シ。いくさ。軍隊。

左傳、莊公八年に「齊師何罪。」

【行軍】 カウゲン。軍隊の行進。

【紀律】 キリツ。「規律」とも書く。のり。おきて。

左傳の桓公二年に「百官於、是乎戒懼、而不取易紀律。」

【方略を詢ふ】 いくさのはかりごとをたづねた。

「方略」(ハウリヤク)は、はかりごと。てだて。計略。こは戰略、即ちいくさのはかりごとをいふ。

史記の方譚書に「爲人長美、言多方略。」  
漢書の霍去病傳に「顯方略如何耳。」

【詢】は音ジュン。「とふ」と訓じ、「諮詢」などと熟する。たづね問ふこと。

【指畫】 シクツク。指示・畫策すること。又、指を以てゑがき示すこと。こゝは第一の意。

禮記の玉藻に「凡有指畫于君前、用芻。」

後漢書の馬援傳に「聚米爲山谷、指畫形勢。」

【策を陳ぶ】 サクをノぶ。はかりごとを陳述する。いくさのかけひきを申しのべる。

【鑿々】 サク／＼。言辭の巧に適中するさま。

こゝは、方略の時宜に適して巧妙を極めるさまの形容。

【擢ぶ】 ヌキンブ。多くのものの中からえらびぬくこと。

拔擢。

【流寓】 リウグウ。さすらひ(流)やどる(寓)義。故郷を出て處々にさすらふこと。飄泊して他國に住むこと。

後漢書の廉范傳に「流寓西州。」

周書の庾信傳に「南北流寓之士、各許還其舊國。」

【糾合】 キウガフ。(糾)は繩をよりあはせる義。(合)よせあつめること。一つにまとめること。鳩合。

左傳の僖公二十六年に「桓公是以糾合諸侯。」

史記の酈食其傳に「起糾合之衆、收散亂之兵、不滿萬人。」

【無慮】 ムリョ。「無慮」とも書く。大體をかいつままで、こまかには計慮しない義。およそ。おほかた。たいて

漢書の趙充國傳に「亡慮萬二千人。」

【日本の装】 日本の武裝。日本兵のいでたち。

「装」はサウ。又、ヨソホヒ。どうよんでもよい。

【援兵】 エンペイ。すくひの兵士。たすけの兵。

【聲言】 セイゲン。いひふらすこと。言ひ廣めること。

【沮む】 ハムむ。くじけ衰へること。意氣の沮喪するこ

と。力がよわること。ひるむこと。

【兵を縦つ】 ヘイをハナつ。兵士を解放して、自由の行動をさせることにいふ。

【縦】は音ショウ。ゆるめること。「一擒一縦」などと熟して用ひる。

【奮撃】 フンゲキ。奮つて敵を撃つこと。

晉書の陶侃傳に「侃被堅執銳、身當戎行。將士奮擊、莫不命。」

【國を傾けて來寇す】 國內の兵士を残らず繰り出して攻めて來た。

「來寇」(ライコウ)は、來りてあたすること。攻め來ること。

【謀を以て之を撓めば】 謀を以て敵をよわらせたならば。

「撓む」(タワむ)は、ま行下二段、他動。これをま行四段、自動の「たわむ」と混同させぬやうにしたい。

【易々】 イ、事の極めて容易なるさまにいふ語。

【一は山陰に伏し】 一隊の兵士は山のかげにかくれ。

「山陰」(サンイン)は、山のかげ。山の北方。



【一は海岸に艦す】 一隊の兵士は海岸にゐて、出船の用意をしてゐた。

【原文】には「海濠」(カイゼイ)とあるが、あまり必要のない熟語だから、「海岸」と改めた。

【艦す】の解は、前に出てゐる。

【挑戦】 テウセン。いどみたゝかふこと。いくさをしかけること。

左傳の宣公十二年の條に「趙旃…請挑戰。」  
漢書の高帝紀に「即漢王欲挑戰。」

【兵既に交はり】 戦が既にはじまること。

【兵】は兵器。武器。

孟子の梁惠王上篇に「兵刃既接、棄甲曳兵而走。」

【伴つて敗走す】 イツハつてハイソウす。まけてにげるふりをした。

【伴】は音ヤウ。いつはること。だますこと。

【號砲】 ガウハウ。あひづとしてうち出す大砲。又、その音。

【呐喊】 トッカカン。多人數一時に大聲を發してさけぶこ

と。をめきさげぶこと。関(トキ)の聲をあげること。

福惠全書、卷二十三に「鳴鑼呐喊。」

【火鎗亂發す】 むやみやたらに銃砲を射出すること。

【火鎗】(クッサウ)は小銃や大砲。銃砲。

【機を視て之に反す】 よい時機を見はからつて、引き返して、敵を撃つこと。

【敵軍を裏(ウチ)にす】 敵軍をうちにつゝむこと。敵の軍隊を包圍すること。

【長驅】 チャウク。長途を馳驅すること。遠道を疾驅すること。とほのり。とほがけ。

戰國策、齊に「輕卒銳兵、長驅至國。」

史記の秦記に「造父爲穆王御、長驅歸周、以救亂。」

【擄】 トリコ。生きながら敵を捕獲すること。いけどり。

東遷基業に「石田を擄にせらるゝ事、一方ならず功勞なり。」

【以て歸る】 キてカへる(率ゐて歸る義)つれてかへつた。

【威】 キ。いきほひ。威勢。威力。

【款を暹羅に送る】 誠意を表した信書を暹羅に送つて、二

心なきことを誓つた。

【款】(クワン)は、まこと。まごころ。誠意。

【妻はす】 メアはす。配して妻とすること。

【六昆の地に封じ】 六昆の大名とすること。

【封す】(ホウサ)とは、領地を與へて諸侯とすることをいふ。

【アンブラ】原文には「庵普良」とある。(10原文参照。)

【蓋し諸侯王の謂なり】 おほかた大名とか王とかのことをいふのである。

【國事を攝行せしむ】 代つて國の政事を取り行はしめた。

【攝行】(セツカウ)は、代つて事を行ふこと。

左傳、隱公元年の杜註に「隱、雖不即位、然攝行君事。」  
皇室典範第三十六條に「攝政在任ノ時ハ前條ノ事ヲ攝行ス。」

【印度諸國に噪がし】 印度の國々までも聞えて、その評判が高かつた。

印度はアジアの南部にある國。印度半島とその胴體部とを占め、地形は略三角形をなす。今は印度の大部・ビルマ・ベルヂスタンを併せて印度帝國と稱し、英國王がその皇帝を兼ね、印度省の下に印度總督を派してこれを統治せしめてゐる。

英領の外、佛領・ポルトガル領等の小地域がある。面積四六八萬五千方軒。人口三億五千萬。

【隔遠】 カクエン。遠く隔たること。遠隔。

【迎勞の使】 デイラウのツカヒ。迎へて遠來の勞をねぎらふ使。

原文には「逐勞之使」とあるが、餘り用ひぬ熟語であるから、改めた。(10参考原文を見よ)

【齊至】 タフシ。重ねて至る義。つどひいたること。あとからあとからと來ること。

【館】 クワン。(一)やかた。たち。(二)やどや。はたご。「旅館」(三公衆の爲に造つた大きな建物。「圖書館」「美術館」など。こゝは(一)又は(二)の意。

左傳の莊公元年に「秋塞王姬之館於外。」

【疑懼】 ギク。うたがひおそれること。うたがひあやぶむこと。

溫庭筠の詩に「激揚銜箭虎、疑懼聽氷狐。」

【且く】 シバラク。かりに。ともかくも。

【冠服】 クアンブク。正服を着け、冠をかぶること。



【交椅】 カウイ。脚がうつてがひになつてゐる椅子。脚部が交叉して、すわりのよい椅子。安樂椅子の類。

【金珠目に祭として云々】 金銀珠玉の飾がきらびやかにその目に映じて、儀仗兵の警衛が甚だ盛んであつた。

【儀衛(ギエイ)は儀仗兵。警衛のために高貴の人につけられる軍隊をいふ。】

【俯伏】 フフク。頭をさげてうつぶすこと。恐れ入るさまにいふ。

史記の蘇秦傳に「昆弟妻嫂、側目不敢仰視、俯伏侍取食。」

【膝行】 シツカウ。ひざまづいて進むこと。片膝づつ摺つて進むこと。

史記の項羽本紀に「無不膝行而前、莫敢仰視。」

【仰視】 ギャウシ。あふぎ見ること。頭をあげて視ること。

【供御】 タゴ。飲食物の敬語。主として高貴の人の御飲食物にいふ。

宇津保物語、藏開、上に「梨壺より奉り給ひしこがねの瓶に、くごを入れかへて。」

源平盛衰記、卷二十五、小督の局の條に「君は御故に思し召し入らせ給ひ、つや／＼供御もきこしめさず。」

【傳呼】 デンコ。それよりそれへと傳へ呼ぶこと。漢書の蕭望之傳に「王仲翁、出入從倉頭廬兒、下車趨門。傳呼甚寵。」

【便服】 ベンブク。くつろぐときに着る着物。ふだんぎ。唐庚の詩に「匪躬老矣惟心在、便服依然但髮稀。」

【肩を拍つ】 カタをウツ。軽く肩をたたくこと。親愛の情を示すときにするわざ。

【故人忌なしや】 舊友の方々、おたつしやですか。

【故人】(一)ふるい交友。昔の友人。舊友。(二)死んだ人。亡き人。(三)文章生の耆宿の稱。こゝは(一)の意。

白居易の詩に「三五夜中新月色、二千里外故人心。」

【愕眙】 ガクチ。又、愕眙。驚いて目を見はること。班固の答賓賦に「雖輕迅與標狡、猶愕眙而不能階。」

【備に】 ツブサに。「具に」とも書く。こまかに。くはしく。つばらに。

神代記に「具(ツブサニ)奏其狀。」

人丸集に「とめ行かむつぶさに跡は見えずとも鹿のはかりは知るといふなり」

【其の發跡の由】 ソのハッセキのヨシ。おのれ(長政)の立身出世して今日の位置に達した由來。

【發跡】 は出身出世すること。「興起」などいふと同意。司馬相如の封禪文に「公劉發跡于西戎。」

【叩頭】 コウトウ。(頭を以て地を叩く義。)頭を地に着けて拜禮すること。

史記の田叔傳に「叔叩頭對曰……」

【鄙人】 ヒジン。身分のいやしい人。こゝは瀧・太田二人の謙稱。

戰國策、燕に「臣東周之鄙人也。」

【愚蒙】 グモウ。愚蒙とも書く。おろかにして、物の道理にくらいこと。愚昧。

杜甫の詩に「誰言養子不識哺。此後亦足爲愚蒙。」

(長政)と御交際を願つてゐまして。」といふ意。瀧・太田二人の謙辭。

【塵埃の中(チンアイのナカ)は、ちりほこりの中。こゝは、俗塵世界をさしていふ。

【青雲】 セイウン。(一)青色の雲。又、あをぞら。あをぐも。(二)高い徳業又は地位。殊に高位高官の稱。(三)世外に超然たること。こゝは(二)の意。

原文には「寥廓之上」とあるが、ホトリハづかしいので、略同意のこの語に改めたのである。

【商旅】 シャウリ。旅あきうど。旅商。

易經の上經に「商旅不行。」

【桑梓】 サウシ。(一)くはとあづさ。(二)ふるさと。故郷。故郷。家郷。昔、支那で、毎戸、くはとあづさとを墻下に植えて子孫に遺したから起つた語。

こゝは(二)の意で、我が日本をさしていふ。

詩經の小雅に「維桑與梓、必恭敬止。靡瞻匪父、靡依匪母。」

王維の詩に「謝病始告歸、依々入桑梓。」



【浅間の神】 アサマのカミ。浅間神社（アサマジンジヤ）の祭神。「浅間神社」は國幣小社。静岡市宮ヶ崎町にある。祭神は木花咲耶姫命・大己貴命・大歳御祖命。醍醐天皇の勅願によつて延喜年中に本宮浅間神社（官幣大社。静岡縣富士郡大宮町櫻が丘に鎮座。祭神は木花咲耶姫命。延喜式内の名神大社）から勧請したもので、一に富士神宮と呼ばれる。

【輒ち】 スナハチ。この字は、「いつでも」といふ意味に用ひられる字。こゝもその意である。

【工】 こゝは畫工。ゑかき。

【摸繪】 モククイ。うつしゑがくこと。實物をまねてゑがくこと。摸寫。

【扁】 ヘン。扁額。室内又は門戸に掲げる額をいふ。

「額」とは、紙・絹又は板などに文字或は繪畫などを記して社寺の門若しくは家の鴨居などに高く掲げるもの。

【商船】 シウハク。商行爲をなす目的で航海する船舶。あきなひぶね。あきうどぶね。あきんどぶね。商船。宣和畫譜に「日本國僧、與其徒五六人、附商船而至。」

【浅間廟】 センゲンベウ。浅間神社。前の「浅間神社」参照。  
「廟」は、(一)おたまや。靈屋。(二)やしる。神社。こゝは(二)の意。

續日本紀、卷二十二に「香椎廟。」  
本朝文粹、卷十に「侍北野廟。」

【報賽】 ハウサイ。祈願の成就した御禮のために神佛に参拜すること。お禮まゐり。但しこゝは神恩を拜謝するといふほどの意。

周禮の小説の疏に「求福謂之禱、報賽謂之祠。」  
吉記、文治元年五月六日の條に「今日爲報賽平家追討事、被行三十二社奉幣。」

原文には、この次に、長政が王妃に毒せられたこと、長政の女阿因が父の讐を報せんとして事を擧げ、遂に敗亡したことが記されてある。(「10参考」の原文参照。)

### 9 挿圖

山田長政像 駿府浅間神社藏。  
浅間神社 釋義「浅間の神」参照。

### 山田長政獻納の墨畫圖 駿河浅間神社藏。

圖中の文字は  
奉掛 所立願  
諸願成就  
當國生  
今天竺暹羅國住居  
寛永三丙寅歲二月吉日山田仁左衛門長政

### 10 参考

本課は生徒の程度を考慮して、原文に若干の省略を加へ、且その語句を改めた。よつて参考の爲左にその原文を掲げる。

暹羅國在南天竺。周廻萬里。物豐人繁。號爲善國。而我山田長政。霸於此云。長政字仁左衛門。或曰、伊勢、祠官之諱。或曰、尾張人。自稱織田右府之孫。少而落髮。有大志。不事商販。業好譚兵。雄傑自喜。流落寓於駿府。元和初、天下始定。士之求仕者、皆于侯伯。長政弗屑曰、「此間無立功名處。唯游海外、或可以展吾志耳。」時下海無禁。府有經商二人、曰瀧、曰太田。將航海回易臺灣。艦舟於大阪。長政請附乘之。二人弗許。長政乃先到大阪、求二人之舟、入而匿焉。既而二人至、揚帆而發。長政乃從輪間出、申前請。二人大驚、不能

如之何、許之。既到臺灣、商事畢、將俱還。長政曰、「某在郷國、殆不能自存。姑欲留此土、覓喫飯處。」二人方思長政之狂、心私喜、委而去之。方此之時、支那姦民、稱日本甲斐、誘我邦邊民、占據臺地。長政通覽地方、最爾一島、且已有主。不可有爲也。又附登船、西游暹羅。會邦内騷亂、四隣交侵。而六昆最强。暹羅國主、出師禦之。長政見其行軍無紀律、私言其必敗。既而果然。人或傳其語、聞於國主。國主奇之、召見長政、詢方略。長政指畫陳策。鑿鑿可用。國主大喜、擢長政爲上將軍、往禦六昆。時邦人流寓暹羅者衆。長政糾合數百人、難以士兵。亡慮萬餘人。皆爲日本裝、聲言日本援兵大至。六昆軍沮。因縱兵奮擊、大破之。六昆王憤甚、傾國來寇。兵數十萬。長政曰、「敵衆強盛、難與爭鋒。唯以謀撓之。」破之易耳。乃分軍爲三。一伏山陰、一橫海濱。長政親率其二、出於海陸之間、進挑戰。兵既交、佯敗走。六昆兵追之。將及。號砲俄發、海陸二軍、吶喊齊進、火槍亂發。長政視機反之、衷敵軍、前後擊之、大破六昆兵、殺數萬人。遂追北。長驅入其都、擒六昆王以歸。威震遠近。四隣爭送款於暹羅。於是國主大賞長政、妻以其女、封六昆及匹皮留之地。號曰暹普良。暹普良蓋諸侯王之謂也。

久之、國主年既高、頗倦。政、使長政攝行國事。於是暹普良之



名、噪<sup>シ</sup>於印度諸國<sup>ニ</sup>。而本邦地隔遠<sup>ニシテ</sup>、未<sup>ダ</sup>聞知<sup>セ</sup>也。數歲<sup>ニシテ</sup>、瀧<sup>・</sup>太田、復<sup>シテ</sup>回<sup>リ</sup>易<sup>シ</sup>海外<sup>ニ</sup>、行<sup>キ</sup>到<sup>リ</sup>暹羅<sup>ニ</sup>。既<sup>ニ</sup>入<sup>リ</sup>其界<sup>ニ</sup>、逐<sup>シ</sup>勞<sup>シ</sup>之使<sup>ヲ</sup>至<sup>シ</sup>、相迎<sup>メ</sup>入<sup>レ</sup>館<sup>ニ</sup>。少<sup>シ</sup>焉<sup>シテ</sup>、有<sup>リ</sup>吏<sup>リ</sup>來<sup>リ</sup>成<sup>ル</sup>、王<sup>ヲ</sup>召<sup>シ</sup>見<sup>ス</sup>二人<sup>ヲ</sup>。二人<sup>ハ</sup>初<sup>メ</sup>不<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>其故<sup>ヲ</sup>、心頗<sup>シ</sup>疑懼<sup>シ</sup>。且<sup>シテ</sup>從<sup>ヒ</sup>吏<sup>リ</sup>入<sup>リ</sup>見<sup>ス</sup>。王<sup>ハ</sup>冠服<sup>シ</sup>在<sup>リ</sup>交椅<sup>ニ</sup>上<sup>ニ</sup>、金珠<sup>・</sup>翠<sup>・</sup>目<sup>・</sup>儀衛<sup>甚</sup>盛<sup>ナリ</sup>。二人<sup>ハ</sup>俯伏<sup>シ</sup>膝行<sup>シ</sup>、不<sup>レ</sup>敢<sup>テ</sup>仰視<sup>ス</sup>。及<sup>テ</sup>退<sup>リ</sup>就<sup>リ</sup>館<sup>ニ</sup>、飲食<sup>・</sup>供御<sup>・</sup>如<sup>シ</sup>下<sup>ニ</sup>待<sup>ツ</sup>貴客<sup>ノ</sup>者<sup>ノ</sup>、意益<sup>シ</sup>不<sup>レ</sup>安<sup>シ</sup>。既<sup>ニ</sup>夜<sup>ニ</sup>、復<sup>シテ</sup>有<sup>リ</sup>吏<sup>リ</sup>傳呼<sup>シ</sup>至<sup>リ</sup>曰<sup>ク</sup>、「王<sup>ハ</sup>來<sup>ル</sup>。二人<sup>ハ</sup>驚<sup>キ</sup>出<sup>テ</sup>迎<sup>ム</sup>。王<sup>ハ</sup>便服<sup>シ</sup>入<sup>リ</sup>坐<sup>ス</sup>。笑<sup>ヒ</sup>拍<sup>ツ</sup>二人<sup>ノ</sup>之肩<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>、「故人<sup>ハ</sup>無<sup>レ</sup>恙<sup>シ</sup>。二人<sup>ハ</sup>愕<sup>リ</sup>眙<sup>シ</sup>仰視<sup>シ</sup>、乃<sup>チ</sup>長政<sup>也</sup>也。長政<sup>ハ</sup>自備<sup>シ</sup>說<sup>ク</sup>其發跡<sup>ノ</sup>之由<sup>ヲ</sup>。二人<sup>ハ</sup>叩頭<sup>シ</sup>謝<sup>リ</sup>曰<sup>ク</sup>、「鄙人<sup>ハ</sup>愚曠<sup>、</sup>嘗<sup>テ</sup>相<sup>コ</sup>從<sup>ヒ</sup>於塵埃<sup>中</sup>、無<sup>レ</sup>禮<sup>・</sup>獲<sup>レ</sup>罪<sup>多</sup>矣。不<sup>レ</sup>意<sup>ハ</sup>、大<sup>王</sup>能<sup>ク</sup>自致<sup>シ</sup>於寥廓<sup>之上</sup>也。」長政<sup>ハ</sup>曰<sup>ク</sup>、「予<sup>ハ</sup>之有<sup>リ</sup>今日<sup>、</sup>實<sup>ニ</sup>由<sup>ニ</sup>三子<sup>ノ</sup>之賜<sup>ニ</sup>。抑<sup>シ</sup>、人<sup>ハ</sup>有<sup>リ</sup>德<sup>於</sup>我<sup>ニ</sup>、可<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>報<sup>シ</sup>哉<sup>シ</sup>。既<sup>ニ</sup>罷<sup>シ</sup>、厚賜<sup>シ</sup>遣<sup>リ</sup>之<sup>ヲ</sup>。本邦<sup>ハ</sup>商旅<sup>・</sup>聞<sup>キ</sup>之<sup>ヲ</sup>、多<sup>ク</sup>游<sup>シ</sup>暹羅<sup>ニ</sup>。長政<sup>ハ</sup>皆善遇<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>。長政<sup>ハ</sup>雖<sup>モ</sup>富貴<sup>ニ</sup>、而常懷<sup>シ</sup>桑梓<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>置<sup>カ</sup>。每<sup>ニ</sup>臨<sup>ム</sup>戰<sup>・</sup>遙禱<sup>シ</sup>於駿府淺間<sup>ノ</sup>之神<sup>ニ</sup>、電<sup>・</sup>飄勝<sup>・</sup>至<sup>リ</sup>是命<sup>シ</sup>工<sup>・</sup>募<sup>シ</sup>繪當<sup>・</sup>時戰鬪<sup>ノ</sup>之狀<sup>ヲ</sup>、爲<sup>シ</sup>扇<sup>・</sup>附<sup>シ</sup>商舶<sup>・</sup>獻<sup>シ</sup>於淺間廟<sup>・</sup>以報賽<sup>焉</sup>。又<sup>ハ</sup>屢<sup>シ</sup>陳<sup>シ</sup>執政<sup>・</sup>納<sup>シ</sup>方物<sup>於</sup>大府<sup>ニ</sup>、不<sup>レ</sup>失<sup>シ</sup>恭順<sup>ノ</sup>之意<sup>ヲ</sup>。頃<sup>ニ</sup>之國主<sup>・</sup>殂<sup>シ</sup>、世子<sup>ハ</sup>代<sup>リ</sup>立<sup>チ</sup>、長政<sup>ハ</sup>退<sup>リ</sup>封<sup>シ</sup>。先<sup>レ</sup>是國主<sup>ノ</sup>之妃<sup>・</sup>與<sup>ニ</sup>其近臣<sup>・</sup>私<sup>シ</sup>謀<sup>シ</sup>除<sup>シ</sup>國主<sup>・</sup>畏<sup>リ</sup>長政<sup>ニ</sup>而不<sup>レ</sup>發<sup>シ</sup>。及<sup>テ</sup>長政<sup>ハ</sup>去<sup>リ</sup>、遂<sup>ニ</sup>弑<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>。長政<sup>ハ</sup>聞<sup>キ</sup>之<sup>ヲ</sup>、則<sup>チ</sup>謀<sup>シ</sup>興<sup>シ</sup>兵<sup>・</sup>討<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>。王妃<sup>等</sup>大懼<sup>シ</sup>、募<sup>リ</sup>人<sup>ヲ</sup>潛<sup>リ</sup>往<sup>シ</sup>毒<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>。長政<sup>ハ</sup>死<sup>ス</sup>。時<sup>ハ</sup>寬永<sup>十</sup>年<sup>也</sup>。長政<sup>ハ</sup>無<sup>レ</sup>子<sup>。有<sup>リ</sup>一</sup>女<sup>・</sup>名<sup>シ</sup>阿因<sup>・</sup>勇武<sup>有<sup>リ</sup></sup>父風<sup>・</sup>親將<sup>・</sup>其衆<sup>・</sup>欲<sup>シ</sup>復<sup>シ</sup>父讎<sup>・</sup>屢<sup>シ</sup>敗<sup>リ</sup>暹羅<sup>ノ</sup>之兵<sup>。通國</sup>震恐<sup>シ</sup>、盡<sup>シ</sup>發<sup>シ</sup>屬國<sup>ノ</sup>之兵<sup>ニ</sup>來<sup>リ</sup>戰<sup>シ</sup>。衆寡<sup>不</sup>敵<sup>シ</sup>、阿因<sup>ハ</sup>遂<sup>ニ</sup>敗<sup>リ</sup>亡<sup>シ</sup>、其下<sup>ハ</sup>迷歸<sup>シ</sup>於本邦<sup>ニ</sup>。長

政<sup>ノ</sup>弟某<sup>ハ</sup>在<sup>リ</sup>江戶<sup>・</sup>聞<sup>キ</sup>長政<sup>ノ</sup>獲<sup>レ</sup>志<sup>・</sup>欲<sup>シ</sup>往<sup>リ</sup>從<sup>ヒ</sup>之<sup>。適<sup>シ</sup>有<sup>リ</sup></sup>人<sup>・</sup>傳<sup>リ</sup>長政<sup>ノ</sup>死<sup>・</sup>乃<sup>チ</sup>止<sup>ム</sup>。

## 二五 ローソップ島の日食

服部 忠彦

### 1 解題

昭和九年四月一日発行の科學畫報所掲の文を節録したもので、ローソップ島に於ける皆虧日食觀測記の一部分である。「科學畫報」は理化學・動植物學・天文學・地質學等に關する一般的の雜誌である。

### 2 作者

服部忠彦 ハットリ タビヒコ。明治四十一年、東京に生れた。東京帝國大學理學部卒業。現在は東京帝國大學理學部助手として天文學教室に勤務し、兼ねて東京天文臺助手として、東京府下三鷹なる同臺に勤めてゐる。

### 3 編纂の用意

本教科書には、最新科學の知識、或は科學上の注目すべき事件等を取扱つた教材をも時に加へて、生徒の常識を

### 4 要旨

廣め、また文化に對する視野を擴大し、國語と生活、國語と科學との交渉を緊密且つ廣汎ならしめんことに留意した。本課の如きはこの目的を達せんがために選ばれた教材の一つである。

### 5 概説

ローソップ島の日食觀測に行つた東京天文臺一行の一人が、これを觀測した時の模様、その前後の事情を子細に敘した文である。先づ、皆虧日食といふ現象の實際を知り、その現象に對する天文學者的研究的熱意を窺ひ、また、その一行と土人との交渉やローソップ島の風土の一端を想見することも、本課に於ける仕事でなくてはならぬ。

前段(一六五頁まで)に於ては、島に上陸した後、日食觀



測のその日に至るまでの、一行の島に於ける生活を敘した。最初頼りなく感じた島にも慣れて、土人との親しみも加はり、そのうち、日食観測の準備も成り、内地で問題にされた星なども珍しく感じないほどに之を見ることが出来た。

後段(一六六頁以下)に於ては、二月十四日、日食観測のその日の事を主として記し、最後に、島を引上げる時の土人との別離の光景をも敘した。日食を待構へてゐるさま、初麁から皆既となるまでの状態、その時の地上の風情、一行の行動、それから復圓前後の事、及び歸り支度、愈、引上げるまでの有様が委しい。

### 6 取扱上の注意

□これは科學的教材である。殊に或程度まで天文學上の興味と知識との、教授者に準備されてゐることが必要である。その點からは、又、地理科との連絡を要する。

□ローソップ島の位置、島民の生活、島そのものが我が委任統治のものである等の點についても、唯、國語の教師でをさまつてばかりはゐられない。地理の先生に厄介に

ならねばなるまい。

□敘事・記事としての文章そのものには、しかし、なかなか文學的のうまさがある。科學者には往々にして文學者の及ばぬ才筆家がある。この作者の文才も十分尊敬に値する。

### 7 設問

- 1 「科學者も今は神に祈るより外はない」といふ、なぜ「科學者も」ともを添へたのであらうか。
- 2 「鬼氣迫る」といふは、どういふ光景か。どうしてさうなつたのか。
- 3 この一行は、この島に何日位滞在したことになるか。
- 4 この一行の仕事といふのは、どういふことであつたと思はれるか。

### 8 釋義

- 5 科學的に精確に書けてゐる點はどこか。
- 6 文學的に敘してある點はどこか。

【ローソップ島】 Loosip. 我が委任統治地たる南洋諸島中の一小島。大洋洲に屬する。

尙、南洋諸島及び委任統治については参考欄を参照されたい。

【軍艦】 この度の日食観測隊のために海軍省は特に便宜をはかつて南洋の往復のため軍艦春日に便乗を許した。

春日は、僚艦日進と共に明治三十六年末、日露兩國の風雲急なる時、我が國が大英斷を以て、苦心の末チリ國から購入し、開戦中偉勳を樹てた軍艦である。

【環礁】 クアンセウ。海中に孤立して、環状をなし、その内に水を湛へる珊瑚礁。普通珊瑚島と呼ぶものはこれである。

【怒濤】 ドタウ。いかりくるふ波。はげしくうちつける波。荒れたつ波。

孟貫の詩に「江上秋風捲怒濤。」

【海拔】 カイバツ。陸地又は山岳の海面よりの高さ。陸の高度を計る標準とする。

【椰子】 ヤシ。棕櫚科椰子屬の常綠喬木。高さ七八十尺に

達する。葉は大形の羽狀複葉で、樹頂に叢生する。花は單性、雌雄同株。果實は三稜を有する核果で、長さ八九寸、徑四五寸に達する。熱帶の各地に自生する。木材は堅牢なために建築その他の用に供せられ、樹皮は砂糖を含むために酒を醸すに用ひられる。果皮の外圍は強靱な纖維に富むを以て、綱具・網等に製せられ、その内圍も亦堅牢なため、コップの代用とし、内圍に附着する堅い胚乳は蠟燭及び石鹼の原料とする。又、内部にある乳液は食用に供する。

【パン】 パンのき。桑科、波羅密樹屬の常綠喬木。高さ三丈。葉は大形、羽狀に分裂し、雌花は多數集まつて球形、雄花は多數集まつて長い花叢をなす。果實は徑六七寸、白色で粉麩質の果肉を有し、焼けば味が稍、パンに似てゐる。熱帶地方に栽培せられ、果實を食用、材を建築用、樹皮の纖維を被服用、樹液を糊料とする。

【タコ】 タコのき。榮蘭科の常綠木。幹の高さは二十尺に達する。葉は細長くて尖り、縁邊に鋭い鋸齒があり、平行脈を具へてゐる。





樹の木の果

はこれである。

【まなざし】 眼つき。

【東京の一行】 東京天文臺から派遣された一組の意。この度の観測隊には、東京天文臺の外に、東京帝大・京都帝大等から派遣された組もあつた。

【珊瑚】 サンゴ。珊瑚蟲の群體の作つた中軸骨格の稱。珊瑚蟲は腔腸動物、珊瑚蟲類の一屬。樹枝狀の群體をなしてゐる。

【炎天】 エンテン。夏の炎暑の空。照りつける夏の日。

孔融の詩に「巖々鐘山首、赫々炎天路。」

【ヌー】 ニー。ローツップ土人の語で、椰子の實をいふ。

【地割】 チワリ。土地の割當。地面の區割。

【コンクリート】 Concrete. 膠泥で砂利又は碎石を膠接せしめた人造石。普通セメント一、石灰二、砂五、砂利八を混合して造る。多く土木工事に用ひる。

【豪雨】 ガウウ。強く降る雨。大雨。

【天水槽】 テンスキヲケ。雨水を貯へるために設けてある槽。

【カノーパス】 Canopus. シリウスについて全天中第二番目に明るい星である。距離は三三〇光年位と思はれる。

これによつて見れば、頗る巨大な星で、實際の光度は太陽の二萬二千倍以上に及ぶものと思はれる。

【南十字】 ミナミジフジ。Crux. 南方の天にある星座の名で、多くの星の集團である。肉眼で見得るもののみでも五十四に及ぶ。

【燦然】 サンゼン。きら／＼とかゞやくさま。

【日食】 ニッショク。月が地球と太陽との間に入つて、その陰影を地球に投じ、地球上のその部分から太陽の全部又は一部を見ることが出来ぬやうになる現象をいふ。全く太陽を見ることが出来ぬ時は之を皆既日食といふ。

。ローツップ島に於ける昭和九年の日食はこれであつた。

一部分を見ることが出来るときは、これを部分日食又は部分食といふ。又、太陽の周邊に輝く部分のみを見得るときは、これを金環食といふ。

【臺長】 東京天文臺長、理學博士早乙女清房。

天文臺は天體の位置・運行、その他、天體上の諸現象を観測する所である。

東京天文臺は東京帝大理學部の附屬で、東京府北多摩郡三鷹村に在る。臺長は東京帝國大學理學部教授中より任命される。

【碇泊】 テイハク。船舶が碇を卸して港に泊ること。

【千載一遇】 センザイイチグウ。千年の間に一度遇ふほど、容易には得がたい好機會をいふ。

袁宏の文に「千載一遇、賢智之嘉會、遇之不能無欣。」

【煤硝子】 ス、ガラス。黒褐色の煙硝子。

【海軍技術研究所】 海軍技術の研究調査等を掌る所。東京にある。科學研究部・電氣研究部・航空研究部及び造船研究部等に分れ、主として最新科學兵器機關の研究調査

し、海軍技術の向上を圖つてゐる。

【クロノメータ】 Chronometre. 進み遅れなく、その歩みの殆ど一定してゐる精密な時計。天文観測又は航海の際、經度を知るために必要な機械である。

【初虧】 ショキ。日食の時、最初に太陽の虧けはじめて見える時をいふ。

【月の影】 太陽面をかくして行く月の姿をいふ。

【常夏】 トコナツ。一年中夏の季節であることをいふ。

【鬼氣】 キキ。ものすごい氣色。なんとなくすごく感ずるけはひ。

暖車志に「多殺機鬼氣。」

【コロナグラフ】 Coronagraph. コロナを撮影する寫眞器。

「コロナ」とは、日食の時、太陽の周圍に現れる白い光をいふ。

【配備】 ハイビ。てくばりして準備すること。

【露出を終つて】 寫眞をとるためにシャッターを切つて、日食の狀況を寫眞機の乾板へ露出させてゐたのを、ふたゝ



びシャッターを閉して。

【日食観測に行く者は日食が見られない】 日食観測に従事するものは、極めて短い時間に色々の仕事を分擔して、色々の部分的研究をせねばならぬから、はじめから終りまでの日食の経過を全部見ることが不可能なことを謂つたものである。

【プロミネンス】 Prominence. 太陽の面から高く外方に噴出してゐる紅色焰状のもの。形状は不定で、常に變化し、高さも太陽の直徑の十分の三に達したものがあつた。本質も種々であつて、強熱せられた水素から成るものがあり、また種々の金屬の蒸氣より成るものもある。

【興奮】 コウフン。感情によつて心氣の奮起すること。刺戟によつて神経の引き立つこと。

【抄る】 ハカドる。はかがゆくこと。仕事次第に仕上げてゆくこと。

【教會】 ケウクワイ。キリスト教の信徒の集合する場所。

【神共にいまして云々】 讚美歌第三百九十二、送別會の歌である。

歌の大意は、

今別れて旅立つ人に、神よ常にその身の側にゐまして、その前途を守り、天よりの恵みの糧をあたへて、この旅人に力を施してやつて下さい。旅を終へて再會する日まで、旅立つ君の身から、神の御守護が去らないやうにといふのである。

【哀愁】 アイシウ。物あはれさ。さびしみ。

【讚美歌】 サンピカ。キリスト教で、神又は救世主の徳を讚美する歌。

【眼頭】 メガシラ。めもと。左右の目の鼻の方によつたはし。「まじり」に對する語。

### 9 挿 圖

本課の挿圖はいづれも昭和九年四月號科學畫報所掲の寫眞を轉載したものである。

「ロソップ島の皆既食」は、皆既食の瞬間を撮影したもので、中央の黒圓が皆既食の太陽、その周圍の白光がコロナである。

「ロソップ島の風景」は、土人の丸木舟。

「日食観測後の晚餐」は、天幕内に於ける成功祝賀の晚餐宴の小景である。

### 10 参 考

#### 1 南洋諸島

赤道以北の太平洋上に散在する一千有餘の島嶼の稱。大部分ドイツに屬してゐたが、大正三年世界大戰の始まるや、我が海軍はヤルト島を始めとして全ドイツ領を占領し、講和條約の結果國際聯盟からナウル島を除いた全ドイツ領の統治を委任され、パラオ島中のコロル島に南洋廳を置いてこれを統治してゐる。面積は二一三六方軒で、略々東京府の面積に過ぎないが、小笠原諸島以南赤道まで、太平洋上に南北二千數百軒・東西四千數百軒の廣大な範圍を領有し、軍事上重要な意義を有する。マリヤナ、マーシャル、カロリン、パラオ等の諸島から成る。我が國の委任統治地域に於ける人口は七五、九〇九人（昭和七年四月一日）、その中二五、七六六人は内地人、九八人は外國人で、他は皆土人である。

#### 2 委任統治

國際聯盟によつて創設され、列強の植民政策に一新紀元を劃した國際法上及び國際政治上の新制度。世界大戰の結果ドイツが

一切の權利を抛棄した植民地は、従前の慣習によれば戰勝國に分割されるのであつたが、ヴェルサイユ講和條約會議に於て、國際聯盟規約第二十二條に委任統治制度が確立されたので、同制度により同植民地並にトルコより分離した舊領土は國際聯盟の監督の下に適當な條件を備へた國の管理または後見を受けることとなつた。委任統治制度はその地域に土著する人民の幸福と將來の發達を圖るために出來たもので、後見する國の利益を目的としたものではない。しかしこの目的を達するため、先進國にして資源、經驗または地理的位置により、それらの人民に對する後見の責任を引受けるに最も適當であり、且つそれを受諾する國に委任して、國際聯盟に代り、受任國としてその後見の任務を行はしめるのである。委任統治には人民の發達程度、領土の地理的地位、經濟狀態その他によつて性質上に差異が認められるので、A式、B式、C式の三種に分つてゐる。南洋諸島はC式に屬するもので、人口稀薄、土地狭小、文明の中心より遠い地域であるので、受任國領土の構成部分としてその國法の下に施設を行ふのである。但し受任國は土地の利益のためにB式に於けると同様、

(一)公の秩序及び善良の風俗に反せざる限り良心及び信教の自由を許與する。



(二) 奴隷の賣買または武器若しくは火酒類の取引の如き弊習を禁止する。

(三) 築城・陸海軍根據地の建設及び警察または地域防禦以外の爲にする土民の軍事教育を禁遏する。

(四) 他の聯盟國の通商貿易に對し均等の機會を確保する。

の四條件を保障せねばならぬ。

委任統治の監視は主として聯盟理事會の權限にあるが、監督實施を保障するために常設委員會を設け、一般に受任國以外より學識經驗ある者を委員に任じ、受任國が毎年理事會に提出すべき統治年報を審査して、その成績について理事會に意見を具申せしめてゐる。

3 神共にいまして

讚美歌第三百九十二

送別會 (Farwell)

一、神ともにいまして

ゆく道を守り

あめのみ糧もて

力を與へませ

折 またあふ日まで

返 またあふ日まで

神のまもり  
汝が身を離れざれ

二、荒野を行くときも  
嵐ふくときも

行手を示して

たえずみちびきませ

三、いぶせき雲おほひ

行きなやむときも

天津み光を

照らしなくさめませ

四、みかどに入る日まで

いつくしみひろき

みつばさのしたに

たえずはぐくみませ

## 二六 伊能忠敬

幸田露伴

### 1 解題

伊能忠敬の評傳であるが、殊にその晩學功を成した事實を讚したものである。

露伴叢書は幸田露伴著。明治三十五年六月博文館發行。一冊本と二冊本とある。著者が明治三十五年以前に書肆博文館の爲に書いた小説・史傳・紀行・隨筆等五十五篇が收めてある。蓋し明治文學の研究資料としても有益の書なること、今更贅するの要もない。

### 2 作者



幸田露伴 カウダ ロバン。  
名は成行。文壇の老大家。文學博士。慶應三年江戸に生れた。舊幕臣幸田成延の子。博學多識、夙に小説家として名を成した。その處女作は、明治二十三年の春雑誌「都の花」に載せた「露

### 3 編纂の用意

現代文壇の老大家幸田露伴翁の快筆に成る伊能忠敬の小

聞々である。同年秋「風流佛」を新著百種に出し、それから文名が大いに揚り、紅葉と共に新文壇の代表者となつた。この年には「國民の友」に西鶴論を載せ、大いに西鶴研究を鼓吹して文壇に大刺戟を與へた。小説としては「五重塔」「二日物語」が傑作である。その文は西鶴に出で、更にこれに漢語・佛語を自由に攝取して一家の文格をなし、他人の追隨を許さない。又その作中の人物も、理想的のもので、どの作にも氏の人生觀や理想が現れて居る。小説家としては明治三十六年に稿を起した長篇「天うつ浪」を完成せず筆を絶つたまゝで、のち新作を出さない。その後は専ら修養論・史傳・隨筆などを書いてゐる。又、平生能く山水を探り、風月を伴とし、殊に釣魚を好むこと甚だしい。明治四十一年九月京都文科大學講師に聘せられたが、間もなくこれを辭した。四十四年文學博士を授けられ、同年五月、文藝院委員となつた。著述に「葉末集」「小菘集」「露伴叢書」「譚言」「潮待ち草」「心のあと」「天うつ浪」「頼朝」「努力論」「洗心録」「幽祕記」「名和長年」「爲朝」「平將門」「蒲生氏郷」等がある。



傳を讀ましめて、その道麗暢達の筆致を味ははしめ、且その齡を忘れ、その身を忘れ、險阻に屈せず、風濤に辟易せず、終に全國測地の大業を完成して學術界に偉大な貢獻を齎した篤學者忠敬の人となりと功績とについて、深く感歎欽慕するところあらしめたい。

#### 4 要旨

常人の到底及ばぬ徳量と、優秀拔群の學才と、旺盛極りない氣力とは、忠敬の晩年の修學によつて遺憾なく現れた。本文は、この近世の偉人の、よく衆に儀表たるべき美點・長所を説くに、實に痒い所に手の届くやうな筆を以てしてゐる。妥當な語句、劃切な譬喩、まことによく意を盡くし、親切を極めてゐる。その一言一句をも苟もしない文章そのものを十分に味ははしめて、主題たる忠敬その人の行狀に感奮興起するところあらしむべきである。即ち傳へられる人物と、傳へる作者と、兩者の人格から或無限の教訓啓示を獲得せしめたいものである。

#### 5 概説

適切なものを御示し下さい。」

曾て、本館編輯所員の一人が、幸田露伴博士にかうお尋ねしたところ、博士は、即ちこの「伊能忠敬」の一文を指摘されたので、「それならば、實はもう疾うから、採録させて戴いてをります。」と申し上げて互に笑つたといふことである。ともかく、この文は、この話に據つて、露伴博士自薦の文であるといつてよいわけだ。果せるかなこれは本教科書に最初に採録されてから随分他の國語教科書にも採用されてゐる。實際、内容上から考へても、形式上から味はつても、本文のやうに讀みごたへ、教へごたへのする文は多くない。古い材料であるが、しかも永久に新しい材料であるといつても過言ではあるまい。(因みにいふ、文末の「誰か日本人を早熟早老の云々」といふ一句は、本教科書編者の附加へたものである。この一句がそのまゝ、他教科書にも採られて、しかも出典は「露伴叢書」としてある。)

或はかういふ文は、勿論少年が讀んでも感激に價するが、むしろ大人の方が、その感激の度を強うするものがある。

第一節(一七三頁—七五頁六行) 忠敬が養家復興の志を成したのは、偏にその徳量の大なるに因る旨を述べ、かたがた世の才氣あるものの弊を説いて、これが反省を促してゐる。

第二節(一七五頁七行—一七八頁八行) 伊能家に對する義務を果し得た忠敬は、始めて吾が天資を發揮すべく、新志を決して郷關を出で、一學徒となつて江戸に寓居する。やがて五十歳の老書生は、三十二歳の師に就いて同門の學生の笑柄となつた。こゝにも忠敬の徳量を窺ふことが出来る。

第三節(一七八頁九行—一七九頁九行) 晩學の難きを忍んで、終によくその學の蘊奥を極め、同門下に比肩するものなきに至つた。

第四節(一七九頁一〇行—一八〇頁) 幕命によつてその學術を實地に應用する時が來た。五十五歳の忠敬は、實に壯者を凌ぐ勃々たる元氣があつたといふ。

#### 6 取扱上の注意

少年子弟の讀みものとして、先生の物された文章の中で

大人殊に老書生である人には直接に應へる文である。しかし生徒には「老書生に於てすらかくの如き元氣あり、況や年少氣銳の子弟に於てをや」といふ風に扱ふべきことと勿論である。

ともかくも伊能忠敬の偉人であることは、この文によつて一際あざやかにされたやうに感ぜられる。これは、傳ふるにその人を得た故であること申すまでもない。即ち露伴博士であつて始めてかく傳へることが出来たのである。

尚、伊能忠敬に關する書を左に擧げておく。

佐野常民著「故伊能先生事蹟」、大須賀庸之助著「伊能忠敬先生贈位始末」等もあるが、最も記述の完備したのは左記の書である。

「偉人伊能忠敬」理學士大谷亮吉及佐原中學校長海鹽錦衛監修、加瀬宗太郎編纂、明治四十四年五月發行。

なほ尋常小學修身書卷六の第十八・十九二課にわたつて忠敬の記事がある。教師用を参照せられたい。

#### 7 設問



- 1 「自ら抑へて」とは如何なる意味か。本文の中で、その意味が説明されてゐるところを讀んで見よ。
- 2 徳量ある人の例を他に知つてゐるか。
- 3 左の文を口語で言うて見よ。  
「後の爲すあらんと欲する者……身の將に老いんとするを歎ずることなかれ。」
- 4 次の言ひ方を應用して句を作れ。  
イ いかでか……べき。  
ロ 況んや……をや。
- 5 次の語句の意義を問ふ。  
イ 辟易。頽齡。晩學。閑散。奇才。丹誠。笑柄。  
ロ 笈を負ひて郷關を出づ。  
ハ 世の務を辭し、花月の遊を事とす。

8 釋義

【伊能忠敬】 イノウタマタカ。徳川末期の天文・測量・製圖の大家。字は子齋。號は東河。通稱は三郎左衛門。晩年に勘解由(カゲユ)と改めた。下總國(千葉縣)武射郡小堤村神保貞恆の第三子。幼時同國香取郡佐原町伊能三

七郎に養はれてその家を嗣いだ。人となり堅忍強記、學を好み、理財の道に長じてゐた。又、慈善の徳に富み、天明三年(二四四三)關東大饑饉の時には、私財を投じて閭里を賑はした。同六年の饑饉にもまた凶荒を救うた。養家を承けたときはその家政が大いに衰へてゐたが、勤儉精勵、遂にこれを復興した。又村吏となつて大いに治績をあげ、篤行を一郷に布いた。五十歳のとき家政をその子景敬に委ねて江戸に出で、高橋東岡に就いて西洋の曆法及び推歩測量の術を修めた。寛政十二年(二四六〇)官命を以て北陸道及び蝦夷地方の東海岸を測量し、享和元年(二四六一)更に命を受けて國內各地の沿岸を測量した。爾來十八年の日子を費して宇内輿地全圖を完成し、これを幕府に上つた。平素氣力旺盛、老に至るまで孜々として測量及び製圖に力め、剛健壯者を凌ぐの概があつた。文政元年(二四七八)卒した。年七十四。明治十六年二月、その學術上の偉功を嘉せられて正四位を追贈せられた。その舊宅の址は現に佐原町に在つて、史蹟に指定せられてゐる。

- 【養嗣子】 ヤウシシ。養子縁組によつて他家の嗣子となること。又、その人。他人をもらひ、養つて嗣子とすること。又、その人。やしなひご。もらひご。養子。
- 【景敬】 カゲタカ。忠敬の子。傳及び生死年月未詳。
- 【平々凡々の人】 ヘイヘボンヘのヒト。極めて平凡な人。つねなみの人。世のつねの人。
- 「平々凡々」は、極めて平凡にして取るに足らぬさまにいふ語。
- 後漢書の班超傳に「我以、班君當有奇策。今所言平々爾。」  
朱熹の齋居感興詩序に「願以思致平凡、筆力萎弱、竟不能就。」
- 【一意専心】 イチイセンシン。心を一事に専らにすること。心をその物事に専らにして、他に散らさぬこと。一所懸命。

新語に「管仲相桓公、誦節事君、專心一意、身無境外之交、心無敵斜之慮。」  
荀子に「專心一志、則通于神明、參于天地矣。」  
孟子の告子上に「不專心致志則不得也。」

- 【任務】 ニンム。おのれの責任を以て取り扱ふべき事務。つとめ。やくめ。
- 【圓滿】 エンマン。十分に満ち足ること。  
南史の梁武帝紀に「有神光、圓滿壇上。」  
平家物語卷七、竹生島詣に「所願成就圓滿すと承れば。」
- 【才氣】 サイキ。すぐれたはたらき。才智。  
史記の項羽本紀に「籍長八尺餘、力能扛鼎、才氣過人。」  
史記の李廣傳に「爲上泣曰、李廣才氣、天下無雙。」
- 【一舉手一投足の勞】 一たび手を舉げ、一たび足を投げだすほどの骨折。少しの骨折を形容していふ。  
韓愈の應科目時與人書に「如有力者、衰其窮而運轉之、蓋一舉手一投足之勞也。」
- 【身を委ねんとす】 この身をまかせようとする。その身をまかせてその事を行はうとする。
- 【徳量】 トクリヤウ。物事を容忍する徳のすぐれてゐること。

後漢書の謝夷吾傳に「班固薦夷吾曰、徳量積謀、有伊呂管晏之任、關弘道與、同史蘇京房之倫。」  
【奇才】 キサイ。世にめづらしい才氣。又その人。



史記の商君傳に「年雖少奇才也。」  
蜀史の諸葛亮傳に「司馬宣王、案行其營壘處所曰、天下奇才也。」

【成功】 セイコウ。事業を成して功績をあげる事。又、仕事のできあがり。

書經の禹貢に「禹錫玄圭告厥成功。」  
論語の泰伯篇に「巍巍乎、其有成功也。」

【中途に事を廢す】 途中でやめてしまふ。

「中途」は、物事のなかば。なかほど。なから半途。途中。

【算數】 サンスウ。(一)かず。數。(二)算用。勘定。計算。(三)算術。數學。算道。こゝは(三)の意。

後漢書の律曆志に「算數之事生矣。」

【曆術】 レキジュツ。日月運行の曆數をはかつて曆を作る方法。

唐書の曆志に「劉歆以春秋易象推合其數、蓋傳會之說也。至唐一行始專用大衍之策、則曆術本于易。」

【資】 シ。天資。資稟。うまれつき。

【市井の凡人に伍し】 まちなかのなみ／＼の人の仲間入りをして。

「市井」(シセイ)は、まちなか。町内。  
「市」は交易の處。「井」は共に汲む處。古は井によつて市をなした。それゆゑ、前のやうな意味になる。

國語に「處士就官府、處商就市井、處農就田野。」  
史記の蕭政傳に「政乃市井之人。」

「凡人」(ボンジン・ボンニン)は、凡庸の人。平凡な人。平治物語、惡源太誅せらるる條に「睨まれたる眼ざし、實に凡人とは見えざりけり。」

「伍す」とは、仲間になること。同列にならぶこと。

史記の韓信傳に「生乃與噲等伍。」

【唯一】 ユキイツ。一有りて二なき意。たつた一つ。

首楞嚴經に「了罔陳習、唯一精眞也。」

【只管】 ヒタスラ。たゞそればかりなる意にいふ語。一途に。一向に。ひたぶるに。切に。

後撰集、秋下に「ひたすらに我が思はなくにおのれさへかりかりとのみ鳴きわたるらむ」

【家業】 カゲフ。家の生業。なりはひ。

列子の天瑞篇に「離六親、廢家業。」

壽門松、卷中に「こなた故に大事の家業もよそになり。」

【丹誠】 タンセイ。心をこめて物事をする事。まじめに事をする事。丹精。

隋書の西突厥傳に「甚有丹誠。」

【義務】 ギム。(一)人が道徳人としてなすべきところのもの。つとめ。義務は必ず道徳律による強制・拘束の概念を含む。(二)法律上、權利に對する觀念。權利が社會的利に對する主張を貫徹し得る法律上の力なるに對し、その主張を容認する法律上の拘束をいふ。こゝは(一)の意。

【閑散の身】 ひまの身分。

「閑散」(カンサン)は、閑暇なこと。ひまなこと。

正字通に「間暇・間冗、與閑同義。」

韻會に「不自檢束爲散。」

韓愈の進學解に「投閑置散、乃分之宜。」

大鏡、卷下に「小松のみかどの、みこたちにておはしましたし時の御所は……いとかんさんにてこそおはしましたしか。」

【常人】 ジャウジン。普通一般の人。なみの人。

戰國策、齊に「奇法章之狀貌、以爲非常人。」

【老境に入る】 ラウキヤウにイ入。老人の境涯に入るこ

と。老人の仲間入をする事。

【心の壯なる人】 心のさかんな人。雄々しい心をもつてゐる人。

世説の豪爽傳に「烈士暮年、壯心不已。」

【前途】 ゼント。ゆく末。ゆく先。ゆくて。前程。將來。こゝは、將來・後來などの意。

【青年】 年のわかい人。丁年前後の人。としわか。わかると。わかもの。

王世貞の詩に「若過長沙、應大笑不以樵悴送青年也。」

【爲すある人】 事を成すに足る才能のある人。有爲の人。

尚書の洪範に「凡厥庶民、有猷、有爲、有守、汝則念之。」

註に「有猷者、有謀慮者、有爲、有施設者、有守、有操守者。」

孟子の公孫丑下に「將大有爲之君、必有所不召之臣。」

註に「大有爲之君、大有作爲非常之君也。」

【花月の遊】 花を觀、月をめめて、風流の遊をなすこと。

【さる程に】 前を受けて更に説きおこす語。然るところに。しかある間に。

源氏物語、蓬生の卷に「大將殿もやんことなくしも思ひきこ



え給はじなど、怒じうけひけり。さる程に、げに世の中にゆるされ給ひて。」

【郷里】 キヤウリ。わが生れた里。ふるさと。故郷。郷關。郷閭。故山。故國。故里。

禮記の經解に「以處郷里、則長幼有序。」  
後漢書の馬援傳に「使郷里稱善人足矣。」

【佐原】 サハラ。千葉縣香取郡佐原町。利根川の河港として發達した市街で、水運の要衝に當り、又鐵道成田線の一驛がある。古來清酒の醸造が盛で、商況が活潑である。町内本橋元（ホンハシモト）に伊能忠敬の住處の址（指定「史蹟」）があり、驛の東四軒に官幣大社香取神宮がある。

【飄然】 ヘウゼン。ふらりと出て來たり、又立ち去つたりするさまにいふ語。飄乎。

【江戸】 エド。今の東京市の舊名。吾妻鏡に、源頼朝舉兵の時、その幕下に參向した江戸太郎重長の名の見えてゐるのが初見である。江戸氏は南北朝の頃までこの地に土着し、その館舎は後の江戸城附近にあつた。その後この

地は江戸郷とも江戸庄とも稱せられたが、室町時代に上杉氏の領となつた。その將太田道灌は長祿元年（二二一七）江戸城を築いて、これにゐた。後、北條氏の有に歸したが、天正十八年（二一五〇）徳川家康は封をこの地に移し、江戸發展の基を開いた。明治元年七月十七日東京と改稱し、聖駕東幸して帝都となつた。

【寓】 グウ。假住居。

説文に「寓寄也。」字典に「寓居也。」

【深川】 フカガハ。今の東京市深川區地方。

「深川區」は東京市の一區。隅田川の左岸にあつて、南は東京灣に沿ひ、北は本所區に、東は城東區に接する。土地が低濕で、河川や池沼が多く、廣い埋立地がある。機械・染織・化學・飲食品等の工業が甚だ盛である。深川・清澄の二公園・水産講習所・高等商船學校等がある。

【尋常一様】 普通に。なみ／＼に。

「尋常一様」とは、なみ／＼で、他と格別の差異のないこと。

【笈を負ひて】 書箱を背負うて。（他郷に遊學することにい

ふ。）

「笈」は音キフ。訓オヒ。行脚僧又は修驗者などが、旅中、佛具・衣服・書籍・食器等を入れて背に負ひ行くもの。多くは箱の制で、脚がある。

漢書の蘇章傳に「負笈追師、不遠千里。」  
註に「笈、書箱也。」

古今著聞集、卷五に「諸國修行の時も、おひに入れて身を放たざりけるを。」

【郷關】 キヤウクワン。郷里の境にある門。轉じて郷里。張説の傳に「相逢皆得意、何處是郷關。」

【都門】 トモン。みやこの入口の門。轉じて、みやこ。こゝは江戸を指していふ。  
礼儀の文に「都門者、都中里門也。」

枕草子、四に「西の方都門を去れること幾ばくの地ぞ。」  
【満足】 マンゾク。望みが満ち足りて不平のないこと。  
南齊書の張敬兒傳に「意知満足。」

狂言、粟田口に「頼うだ人に今の通りを申し上げたならば、殊ない御満足であらうぞ。」

【信仰】 シンカウ。信じてうやまひたつとぶこと。一心に

信ずると。

古今著聞集、卷一に「この示現聞きて、いかばかり、いよ／＼信仰の心も深かりけむ。」

【幕府】 大將軍の軍營。轉じて大將軍が軍務や政務を執るところ。

史記の註に「大將軍之府、曰幕府。軍至之處、以幕構將軍之居處、在其中一以治事也。」  
こゝは徳川幕府を指す。

「徳川幕府」は徳川氏の政府。「江戸幕府」ともいふ。徳川家康は天正十八年（二二五〇）江戸城に入り、慶長五年（二二六〇）關ヶ原役後兵馬の權を掌握し、八年遂に征夷大將軍と成つて政を行つた。これが徳川幕府の始である。爾來子孫が相繼いでこれを繼承し、十五代、二百六十八年に及んだが、慶應三年（二五二七）徳川慶喜に至つてその職を辭し、幕府はこゝに滅びた。

【曆法改正の擧】 レキハフカイセイのキョ。曆を改めるくはだて。寛永十年（二二九三）從來の寶曆曆を改正して寛政十年に寛政戊午元曆の出來たことをいふ。天文官高橋左衛門がこれを司り、澁川秀外・山階徳風・古田鞞負等がこれに與つた。

我が國では持統天皇の四年（一三五三）十一月始めて元嘉曆（宋



の何承天作)が行はれてより、儀鳳曆(唐の淳鳳作。文武天皇の元年(一三五七)頒行)・大衍曆(唐の一行禪師作。天平寶字七年(一四二二)頒行)・五紀曆(唐の郭獻作。齊衡三年(一五一六)頒行)・宣明曆(唐の徐昂作。貞觀三年(一五二一)頒行)に至るまで、凡そ一千餘年間支那曆を用ひ來つたが、貞享元年(二三四四)保井春海(後、澁川と改めた)の新曆を採用して始めて國曆を頒布することを得た。これを貞享曆といふ。それから七十年の後、安倍泰邦等が命を受けてこれを改正し、寶曆甲戌元曆(二四一四)が成り、行はるゝこと四十餘年にして、曆日が天度に先だつこと幾ど三刻に及んだ。由つて又これを改めたものが即ち寛政曆である。然るに、この後四十年にして時曆が又時刻を差へた。よつて天保十二年(二五〇二)に至り、澁川景佐・山路階孝等が改訂の事に當つた。それを天保壬寅元曆といふ。かくて明治に至り、グレゴリー曆が用ひられ、始めて太陽曆が行はれることとなつた。

【高橋作左衛門】 徳川時代の曆學者で、我が國曆學上に一紀元を劃した人である。名は至時、字は子春、東岡又は梅軒と號した。大阪の御定番同心元亮の子。性曆學を好み、麻田剛立に就いて天文を學んだ。寛政七年(二四五五)擢んでられて曆官となつた。推歩の精確なること、一時及ぶものがなかつた。吉田秀升・山階徳風等と古今

を參酌し、消長法を立てて新曆を作り、これを幕府に上つた。幕府はこれを容れて、同九年(二四五七)その曆を天下に頒つた。謂はゆる寛政曆である。その作にかゝる曆説は二十餘卷に及ぶ。文化元年(二四六四)正月十五日(一説に五日)病んで卒した。年四十一。下谷の源空寺に葬つた。

大正三年十一月、從五位を追贈せられた。

【曆象の學】 レキシヤウのガク。天文學をいふ。

尙書の堯典に「乃命羲和、欽若昊天、曆象日月星辰、敬授人時。」

蔡傳に「曆所以紀數之書。象所以觀天之器。」

易經の革卦に「曆象謂日月星辰也。」

【普通の人情】 なみ一通りの人情。

「人情」(ニンジャウ)とは、(一)人類の本能として具へてゐる情愛。なさけ。いつくしみ。(二)人心自然の情狀。こゝは(二)の意。

【學識】 ガクシキ。(一)學問と見識。(二)學問上の識見。學問上より得た識見。

南史の韋報傳に「祖征曰、汝文章或小減。學識當過之。」

【拜伏】 ハイフク。ひれふすこと。伏しをがむこと。

北史、齊の孝昭帝傳に「帝唯啼泣拜伏、竟無所可言。」  
傳燈錄に「皆望塵拜伏。」

【門下生】 門人。弟子。

後漢書の承宮傳「過徐盛廬、聽經、遂請留門下。」の註に「續漢書云、宮棄其猪、猪主欲啗之。門下生共禁止。」

【同門の弟子】 相弟子の學生。

「同門」とは、同じ師に就いて學ぶもの。相弟子。  
漢書の儒林傳に「孟喜得易家候、陰陽災變一書、以擢同門梁邱賀。」註に「同門、同師學者也。」

【笑柄】 セウヘイ。笑ふべき談柄。わらひぐさ。

「談柄」は談話の際、手に執る拂子の類。轉じて、話の種類といふ意になつた。

劉禹錫の詩に「高筵談柄一麾拂、講下聽徒如醉醒。」

趙翼の納涼の詩に「一語應添笑柄新。」

【晚學】 バンガク。年長じて學に志すこと。

顏氏家訓に「孔子五十學易、曾子七十、荀子五十、不恥學之晚。」

鶴林玉露に「高適五十始爲詩、爲少陵所推。老蘇三十始讀書、爲歐公所許。功深力到無早晚也。聖賢之學亦然。東坡詩云、貧家淨掃地、貧女巧梳頭、下士晚聞道、聊以拙修。朱文公每借此句作話頭、接引窮鄉晚學之士。」

【事實】 ジジツ。實際の事。まことの事迹。

史記の莊周傳に「率皆虛語、無事實。」

【非凡の士】 ヒボンのシ。なみすぐれた人。

「非凡」は、平凡ならぬこと。なみすぐれてゐること。

蜀志、先主傳に「舍東南有桑樹、高五丈餘、遙望見、重々如小車蓋、往來者皆怪此樹非凡。」

【區々】 ク。小さくてつまらないさまにいふ語。

漢書の楚元王傳に「豈爲區々之禮哉。」註に「師古曰、區々、謂小也。」

【群小】 グンセウ。多くの小人。

「小人」は(一)身分の賤しいもの。(二)徳行の薄いもの。こゝは(二)の意。

詩經の邶風に「憂心悄悄、慍于群小。」

【嘲笑】 テウセウ。あざけり笑ふこと。あざ笑ふこと。

魏書の尉地干傳に「尤善嘲笑。世祖見其效、入舉措、忻悅。」



不能<sup>ハ</sup>自勝<sup>ル</sup>、甚見<sup>ル</sup>親愛<sup>セ</sup>。」

【蛙鳴蟬噪】 アメイゼンサウ。蛙や蟬がさわがしく鳴くこと。つまらぬことをしやべりちらすたとへ。

韓愈の平淮西碑評に「段文昌以<sup>レ</sup>駢四龍六、蛙鳴蟬噪之音<sup>ヲ</sup>、鈞天之奏<sup>ニ</sup>直不<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>人間有<sup>ル</sup>羞恥事<sup>ナ</sup>。」

【比較】 ヒカウ。くらべること。くらべあはせること。俗に「ヒカク」とよむが、正しくない。

【堤防の決潰して云々】 つゝみがきれて大水のおしよせるやうないきほひ。非常に烈しい勢の形容。

「堤防」(テイバウ)は、つゝみ。どて。池や川の水のあふれるのを防ぐために、岸に沿うて土を高く築いたもの。

史記の秦始皇本紀に「決通堤防。」

「決潰」(ケツクワイ)は、あふれるやうになつて、切れつゝいえること。充ちて裂け潰えること。決壊。

「洪水」(コウズキ)は、大水。

書經の堯典に「湯々洪水。」

類聚三代格、卷十五に「洪水滔天、大旱饑地。」

源平盛衰記、二十四、淨見原天皇の條に「降る雨車軸を下して、鈴鹿川に洪水漲り下りて、渡り難かりけるに」

【蘊奥】 ウンアウ。ウンノウと發音する。「蘊」は蓄へる義、「奥」はふかい義。(學術・技藝又は理義の奥深いところ。奥そこ。奥義。

宋史の理宗記に「朕觀<sup>ニ</sup>朱熹集注大學論語孟子中庸<sup>ニ</sup>發<sup>シ</sup>揮聖賢蘊奥<sup>ヲ</sup>有<sup>リ</sup>補<sup>フ</sup>治道<sup>ナ</sup>。」

【肩を比すべきもの】 肩を並ぶべきもの。同列に立つべきもの。

戰國策、齊に「千里而一士、是比<sup>レ</sup>肩而立<sup>チ</sup>、百世而一聖、若<sup>シ</sup>隨<sup>ヒ</sup>踵而至<sup>ル</sup>也。」

【測量】 ソクリヤウ。(一)物體の大小・位置及び方向を數學的に測定すること。(二)地球の表面上の或部分の形狀・大小・位置等を測定し、且これを圖示すること。こゝは(二)の意。

【實地に運用する機に際したるは】 實際にはたらかし用ひる場合に出くはしたのは。

【運用】 は、はたらかし用ひること。活用。

宋史の岳飛傳に「飛曰、陣而後戰兵法之常。運用之妙、存乎

一心。」

【頽齡】 タイレイ。かたむきおとろへたよはひ。老齡。老年。

謝靈運の詩に「舊業橫<sup>ニ</sup>海外<sup>ニ</sup>、蕪穢積<sup>ニ</sup>頽齡<sup>ナ</sup>。」

【氣力旺盛】 元氣の極めてさかんなこと。

「氣力」は、活動に堪へ得る精神の力。又、精根。氣根。根氣。

列子の湯問篇に「取<sup>リ</sup>道致<sup>シ</sup>遠<sup>キ</sup>、而氣力有<sup>リ</sup>餘<sup>リ</sup>。」

朗詠集に「柳無<sup>ニ</sup>氣力<sup>ナ</sup>條先動。」

「旺盛」(ワウセイ)は、極めて盛んなこと。

「壯年」(サウネン)は、人の一生中最もさかんな年頃。三十歳前後の年齡。壯齡。壯齒。

太平記、二、三人僧徒關東下向の條に「壯年の比より醍醐寺に移住して」

【即日】 ソクジツ。その日すぐ。すぐその日。

史記の項羽本紀に「項王即日、因留<sup>ニ</sup>沛公<sup>ニ</sup>與飲。」

同書の孝文本紀に「皇帝即日夕、入<sup>ニ</sup>未央宮<sup>ニ</sup>。」

【勇往直前】 ユウワウチョクゼン。勢よく、傍目もふらず

に進むこと。まつしくらに勇み進むこと。

漢書の外戚傳に「馮健仔直前、當<sup>レ</sup>熊而立<sup>ツ</sup>。」

【險阻に屈せず】 けはしい山路などにくじけひるまず。

「險阻」(ケンソ)は、けはしいこと。けはしい場處。險峻。

易經の繫辭の疏に「大難曰<sup>レ</sup>險、小難曰<sup>レ</sup>阻。」

左傳の成公十三年に「跋<sup>ニ</sup>履山川<sup>ニ</sup>、踰<sup>ニ</sup>越險阻<sup>ナ</sup>。」

太平記、三、陶山・小見山夜討の條に「それより上には、さまでの險阻なかりければ、或は葛の根にとりつき」

【風濤に辟易せず】 風や波におそれ、しりごみせず。

「風濤」(フウタウ)は、風や波。又、風が吹いて浪の荒いこと。かぜなみ。なみかぜ。

李延年の詩に「春江壯<sup>ニ</sup>風濤<sup>ナ</sup>。」

太平記、二十四、天龍寺建立の條に「石を集めては烟障の色を假り、樹を植えては風濤の聲を移す。」

【辟易】(ヘキエキ)は、路を辟(サ)け、所を易(カ)へる義。(一)おそれて立ちのくこと。恐れてしりごみすること。(二)他の勢におされること。たじろぐこと。

史記の項羽本紀に「人馬俱驚、辟易<sup>ニ</sup>數里<sup>ナ</sup>。」



註に「師古曰、辟易謂開而易其本處。」

通鑑輯覽に「辟易驚却之貌。」

太平記、八、山徒京都に寄する條に「その勢にや辟易しけん、只山上へとのみ引き返しける。」

【完成】 クッンセイ。完然に成し遂げること。しあげることに。しおほせること

【一に】 「壹に」とも書く。もつばら。ひとへに。

大學に「自天子以至庶人壹是以修其身爲本。」

【元氣勃々】 ゲンキボツツ。元氣の極めてさかんなさま。

「元氣」は心身の活動力。

「勃々」は物事の盛んに起り立つさまにいふ語。

淮南子の時訓に「勃々陽々、惟德是行。」

【胸裏】 キョウリ。むねのうち。心の中。胸中。

【早熟早老】 サウジユクサウラウ。早くおとなびて、早くとしとること。

### 9 挿 圖

#### 伊能忠敬像

千葉縣佐原町なる伊能家に傳はつてゐる忠敬の肖像畫。

#### 地圖と測量機

伊能忠敬が作製した地圖及びその地圖を作製するに用ひた測量機。

## 二七 死して惜しまるゝ人となれ

嘉納治五郎

### 1 解 題

嘉納治五郎氏の嘗て設立した造士館から發行されてゐた修養雜誌「國士」の中から採録した。

### 2 作 者

嘉納治五郎 カナフ チゴラウ。 教育家。前東京高等師範學校校長。 貴族院議員。講道館師範。萬延元年(二五二〇)攝津國(兵庫縣)



武庫郡御影町に生れた。父は治郎作希芝といつて、幕末の有志家であつた。明治十四年東京大學文學科卒業。十五年學習院講師となり、十八年同院監事、十九年同院教授兼教頭に任ぜられた。二十二年宮内省御用掛となつて歐洲に差遣せられた。翌年歸朝して文部省參事官に任ぜられ、第五高等學校長を兼ね、ついで、第一高等學校長に轉じた。二十六年高等師範學校長となつた。三十一年文部省普通學務局長に任ぜられたが、幾ばくもなくこれを辭した。三十四年再び高等師範

### 3 編纂の用意

學校長に任ぜられ、大正九年一月までその職に在つた。その年歐米漫遊の途に就き、翌年歸朝。十一年勅選議員に擧げられた。嘗て造士館を設け、雜誌「國士」を發行して青年子弟修養の機關とした。又嘉納塾を設け、青年子弟を收容し、以てその監督指導に任じた。尙氏の偉業は實に柔道にある。氏は柔道の諸流を折衷して講道館柔道を創め、その道場として講道館を設け、現に師範としてその普及につとめてゐる。及門の子弟は全國をはじめ歐米諸國に及び、その數無慮數萬に達するといふ。

### 4 要 旨

前課「伊能忠敬の晩學」に關聯して、青少年修養の好資料たる本課を掲げ、以て本卷の總括りとした。諄々として説き出された金玉の文字は、げに未來國民の中堅を以て自ら任ずべき青少年の好指針である。よろしく熟讀玩味せしめて、彼等が精神修養の糧たらしむべきである。 文題が全文の要旨を示してゐる。人は生來、父母・師長・



社会・国家の恩恵によつて生を営んでゐる。その諸恩に酬いるのは勿論、その諸恩に酬い得て、更に積極的に社会国家に貢献し、天下萬民から惜しまれる人とならねばならぬといふのである。

純然たる教訓談であるが、作者にその人を得て、文章としても辭様がよく整ひ、朗々誦すべきものがあることを思はしめたい。

### 5 概説

第一節（一八一頁—一八三頁四行）父母の恩、師長の恩、君國の恩の鴻大なるを説き、これらに報いるのは人間當然の義務であることを論じた。

第二節（一八三頁五行—一八四頁一〇行）人間の生涯の區區たることに就いて、先づ醉生夢死する輩の排すべきを言ひ、次に自營自活繼かに自ら受けた所に酬いる程度の人物を論じ、共にこれ理想的ならざる由を説いた。

第三節（一八四頁末行—一八六頁）父母・師長・君國の恩に酬い得て、更にそれ以上に國家的社会的貢獻を爲し、

死して惜しまるゝ人となるべきを論じた。

### 6 取扱上の注意

■内容が立派であれば、作者の何人であるかは問はないでもよいわけであるが、教訓談の如きは、さうばかりも行かない。そこで、本課も作者その人を適當に紹介して後に教授に入る方が、その効果は大きいであらう。

■文章そのものも、主旨が明晰でよく透徹し、辭様もまた妥當で、殆ど間然する所がない。さういふ點からも、精讀的に扱ふべきであらう。それは單に辭句の註釋といふよりも、全篇の文勢、章句の調子といふものを納得玩味させる爲に。

■文章の組織、思想の構成といふ方面を考察させる上からいつても、本課は適當な材料である。淺薄な文章教授になつてしまつてはいけませんが、本文の主題とするところを全的に攝取させる一方には、又、以上のやうな組織、構成に留意せしめて見る試も、一つの仕事であらう。

### 7 設問

1 この文に於て説かれてゐる恩は、幾種類となるか。

2 人間の生涯については、如何に説いてあるか。

3 作者が最も力を入れて説いてゐることは、どういふことか。

4 作者は大體、どういふ氣分でこの文を書いたと思はれるか。

5 次の語を書取つて、その意味を記せ。

- イ 呱呱の聲。
- ロ 黑白を辨ず。
- ハ 生民の安寧を維持す。
- ニ 塗炭の苦に陥る。
- ホ 醉生夢死。
- ヘ 前途遼遠。

### 8 釋義

【呱呱】 コ、。乳兒の啼く聲の形容。

書經の益稷に「啓呱呱而泣。」

【成人】 セイジン。一人前の人。成年の人。おとな。

禮記の冠義に「已冠而字之、成人之道也。」

史記の周本紀に「及爲成人、遂好農耕。」

### 【自營】

ジエイ。自ら爲すこと。おのれの身のために謀りいとなむこと。

唐書の蘇味道傳に「味道特具位、未嘗有所發明、以私自營而已。」

【自活】 ジクワツ。自力で生活すること。獨立して生計をいとなむこと。

【恩徳】 オントク。恩と徳。めぐみ。  
漢書の高帝紀に「施恩徳、賜民爵。」  
諸曲、鷺に「鳥類畜類も王威の恩徳のがれぬ身ぞとて」

【鴻恩】 コウオン。「洪恩」とも書く。高大な恩。大恩。  
吳越春秋に「蒙大王鴻恩、得君臣相保。」  
荀勗の詩に「洪恩普暢、慶及群臣。」  
曾我扇八景、中に「乳房を含め、抱きかゝへ育てられたる鴻恩は」

【疲勞】 ヒラウ。つかれること。くたびれること。

【千辛萬苦】 センシンバンク。千萬の辛苦。いろ／＼さまさまの難儀苦勞をすること。

【保育】 ハウイク。ホイイク。保護養育すること。



皇室典範第二十六條に「天皇未タ成年ニ達セサルトキハ太傅ヲ置キテ保育ヲ掌ラシム」

【師長】 シチャウ。師匠と長上。先生と長者。周禮の地官に「順行以事師長」

【黑白を辨する頃】 物事の是非正邪などをわきまへ知る頃。

「黑白」(コクビヤク)は、(一)くろとしろ。(二)是と非、正と邪。善と惡。こゝは(二)の意。

春秋繁露に「黑白分明、然後民知所去就」

十訓抄、卷中に「肝心失せて、黑白見えわくべき心地も侍らず。」

【社会】 シヤクツイ。共同生活をなす人類の團體又は組織。世の中。

近思錄に「鄉民爲社會、爲立科條、旌別善惡、使有勸有恥。」

更に詳密にこれを解説すれば、社會とは、形式的には意思による人類の結合をいふ。この定義に従へば、一般社會の外、學生社會、役人社會、特殊なる社會を含めることが出来る。社會學では、普通に人間の協力關係であると説明される。マルキシズムでは、人類がその物質的生活の社會的生産のために相結ぶ諸

關係の總和を意味し、それは歴史的発展の過程にあると説く。(Society)

【事理】 ジリ。物事の道理。事のすぢみち。事のわけ。黄公望の詩に「心逸忘事理」

【道德】 ダウトク。人の履み行ふべき正しい道。人倫五常の道。

禮記の玉制に「一ニ道德以同俗」

【保全】 ハウゼン。ホゼン。保護して全うせしめること。後漢書の龐公傳に「保全一身、孰若保全天下乎」

【獨立】 ドクリツ。他の助を借らず、又他の支配束縛を受けないで、自ら立つこと。

易經の上經に「君子以獨立、不懼」

【基礎】 キソ。一いしすゑ。どだい。(二)物事のもとの。根柢。こゝは(二)の意。

【至尊】 シソン。通例シイソンと發音する。極めて尊い意より天子の御上を申し奉る語。

史記の武帝紀に「朕以眇々之身、承至尊」

過秦論に「履至尊而制六合」

【國家】 コクカ。特定の土地に於て獨立の主權により統治せられる人民の團體。土地と人民と主權とより成る。その起源については、征服起源説・神權説・社會契約説・進化説などいろいろある。こゝは勿論我が日本帝國をさす。

【仁慈】 ジンジ。いつくしみめぐむこと。なさげぶかいこと。慈仁。

曹植の文に「侍臣省奏文、陛下體仁慈」

【臣民】 シンミン。一國の統治權に對して絶對服從の状態にある人民。被治者。

【愛撫】 アイブ。いつくしみなでること。かはいがること。宋史の范仲淹傳に「號令明白、愛撫士卒」

【宏大】 カウダイ。「廣大」と同意。ひろく大きいこと。

【聖德】 セイトク。天皇の御徳を申し奉る語。史記の太史公自序に「臣下百官、力誦聖德」

【統治】 トウヂ。すべをさめること。書經の外傳に「四海咸建五長」に「以相統治、以獎帝室」

【國家各種の機關】 國家統治に關する各種の機關。行政機關(政府)・立法機關(議會)・司法機關(裁判所)等をいふ。

「機關」(キクワン)は(一)活動の装置をした器械。からくり。(二)他人の行動の目的を達する手段として設置せられたもの。その目的の主體よりして國家機關と私人機關とに分ち、その組織の方法よりして合議機關と單獨機關とに分ち、その權限の性質よりして意思機關と執行機關とに分つ。こゝは勿論(二)の意。

【生民】 セイミン。たみ。たみくさ。人民。

書經の革命に「道洽政治、澤潤生民」

【安寧】 アンネイ。禍亂がなくて安らかなこと。安泰。平和。安穩。

史記の周紀に「成康之際、天下安寧」

【維持】 キヂ。つなぎもつこと。もちこたへること。丁實の晉紀總論に「頼道德典刑以維持之」

【福祉】 フクシ。フクチ。さいはひ。幸福。易林に「賜我福祉、壽算無極」

【兇惡】 キョウアク。又「凶惡」とも書く。極めて悪しきこと。又、そのもの。極惡。







【多少】 タセウ。多きと少きと。數量の程度。(二)幾らか。幾分か。すこし。こゝは(二)の意。

【裨益】 ヒエキ。裨益とも書く。たすけとなること。補益すること。

詩經の國風に「王事適<sub>レ</sub>我、政事一<sub>ニ</sub>裨<sub>ニ</sub>益<sub>ニ</sub>我<sub>一</sub>。」  
漢書の趙后傳に「孝成皇帝、至思、所以萬<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>衆<sub>ニ</sub>臣<sub>一</sub>。」

【事業】 ジゲフ。わざ。しごと。  
易經の上經に「所<sub>レ</sub>營<sub>ニ</sub>謂<sub>ニ</sub>之事<sub>一</sub>、事成謂<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>業<sub>一</sub>。」  
易經の上經に「暢<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>四<sub>ニ</sub>支<sub>一</sub>、發<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>事<sub>一</sub>、美<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>至<sub>ニ</sub>也<sub>一</sub>。」

【流風遺韻】 リウフウキキン。昔の教化の今に遺つてゐるもの。先人の美風。

孟子の公孫丑上に「清風善政、猶在<sub>ニ</sub>存<sub>ニ</sub>者<sub>一</sub>。」

【理想】 リサウ。(Ideal)の譯語。意思が努力して到達する最高目標。眞善美等はこれである。理想は意思に従つて行爲により實現されるべきものであるが、その完全な實現は人間には許されない。普通にはより具體的に解せられ、具象的模範の意に用ひられる。

【人間天賦の能力】 人間に天から與へられてゐる才のはたらき。

「天賦」(テンプ)は、人が天から賦與せられてゐること。人が生れながらに具有すること。うまれつき。天稟。天性。天資。

舊唐書の僖宗紀に「神資壯烈、天賦機謀。」  
「能力」(ノウリキ)は、よくはたらく力。事を成し得る力。はたらき。

柳宗元の牛賦に「命有<sub>ニ</sub>好醜<sub>一</sub>、匪<sub>ニ</sub>汝<sub>ニ</sub>能力<sub>一</sub>。」

【餘裕の綽々たるものあり】 十分にゆとりのあること。

「餘裕」(ヨユウ)は、あまりがあつて、ゆたかなこと。餘地があつて、窮屈ならぬこと。ゆとり。くつろぎ。

「綽々」(シヤクシヤク)は、ゆるやかで餘地のあるさま。

孟子の公孫丑下に「則<sub>ニ</sub>吾<sub>ニ</sub>進<sub>ニ</sub>退<sub>一</sub>、豈不<sub>ニ</sub>綽<sub>ニ</sub>々<sub>ニ</sub>然<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>餘<sub>ニ</sub>裕<sub>一</sub>哉。」

【餘澤】 ヨタク。残れる恩澤。餘つて他にも及ぶ德澤。餘德。餘光。おかけ。

曾鞏の焚告文に「後<sub>ニ</sub>蒙<sub>ニ</sub>餘<sub>ニ</sub>澤<sub>一</sub>、備<sub>ニ</sub>位<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>朝<sub>一</sub>。」

【長へに】 トコシへに。トコシナへに。永久に。長久に。

永遠に。

【追憶】 ツキオク。過去のことをあとより追うて思ひ出すこと。追想。追懐。

鮑照の詩に「追憶宿昔時。」

【前途有爲の少壯諸子】 これから後に、事を爲すべき才能のある年わか諸君。

「少壯」(セウサウ)は、年のわかいこと。殊に二十歳前後の稱。

前漢武帝の秋風辭に「少壯幾時兮奈<sub>レ</sub>老<sub>レ</sub>何<sub>一</sub>。」

【聖治を賛す】 セイチをサンす。天皇の聖明なる御政治を賛助し奉ること。

【忠誠】 チュウセイ。(一)まめやかにしてまことあること。(二)忠義一徹なること。誠忠。こゝは(二)の意。

徐陵の文に「忠誠貫<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>日月<sub>一</sub>、孝義感<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>氷霜<sub>一</sub>。」

【闔國民】 カフコクミン。日本全國の臣民。

「闔國」は、全國。舉國。

【進運】 シンウシ。進歩の機運。

【遼遠】 レウエン。遙かに遠いさま。

楚辭の九章に「惟<sub>ニ</sub>郢<sub>ニ</sub>路<sub>一</sub>之<sub>ニ</sub>遼<sub>ニ</sub>遠<sub>一</sub>兮、魂<sub>一</sub>一夕<sub>ニ</sub>而<sub>ニ</sub>九<sub>ニ</sub>逝<sub>一</sub>。」  
源平盛衰記、卷九、祝言の條に「權現の德を仰がずんば、何ぞ志を遼遠の境に盡くさん。」

【一生の覺悟】 一生の間になすべき事についての心がまへ。

「覺悟」(カクゴ)は(一)物事の道理をさとること。又さとすこと。(二)あきらめること。觀念。(三)豫め心がまへすること。豫期。期待。こゝは(三)の意。

【抑】 ソモ。こゝは、たゞしはまた、それともまた、などいふほどの意。

論語の學而篇に「夫子至於<sub>ニ</sub>是<sub>ニ</sub>邦<sub>一</sub>也、必<sub>ニ</sub>問<sub>ニ</sub>其<sub>ニ</sub>政<sub>一</sub>求<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>與<sub>一</sub>、抑<sub>ニ</sub>與<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>與<sub>一</sub>。」

【舉國】 キコク。國民全體。全國。闔國。  
左傳の隱公元年の杜註に「叔久不<sub>レ</sub>除、則<sub>ニ</sub>舉<sub>ニ</sub>國<sub>一</sub>之<sub>ニ</sub>民<sub>一</sub>、當<sub>ニ</sub>生<sub>ニ</sub>他<sub>ニ</sub>心<sub>一</sub>。」

【悼惜】 タウセキ。人の死去を悼(イタ)み惜しむこと。哀惜。

「悼」は、いたみ悲しみて心の動くこと。傷悼・嘆悼・哀



悼・痛悼・驚悼などと熟する。  
宸悼・軫悼は天子の御なげきにいふ。

9 挿 圖

嘉納治五郎筆蹟

精力善用

歸一齋

弊館が特に嘉納先生に請うて揮毫していただいたもの。  
「歸一齋」は同先生の雅號である。

中國文教科書教授備考 卷二

中國文教科書教授備考 卷二 修正二十三版用

昭和十年九月十日 印刷  
昭和十年九月十三日 發行

非 賣 品



編者	光風館編輯所	東京市神田區神保町一丁目五番地
發行者	上原才一郎	東京市神田區神保町一丁目五番地
發行所	光風館書店	(電話) 神田三〇八七番 (振替口座) 東京三二七番
印刷者	根本力三	東京市牛込區市谷加賀町一丁目一二番地 大日本印刷株式會社

吉田彌平編 △修正二十三版▽

昭和九年十二月二十六日  
文部省檢定済

中國文教科書

和裝全拾册

光風館編輯所編

中國文教科書教授備考

(洋裝全拾册)  
(非賣品)



